

明治三十九年六月二十一日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第四拾四號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十四號目次

論 說

○眞の宗教は個人の心情にあり……千田 流兒

雜 録

○若草(前號の續)……み、

文 苑

○彈琴の卷……斗 牛

○越の旅……某

○苧環の記……萍 水

○六月五日……斗 牛

○花あやめ……斗 牛

○送大島師團長出征序……村上 亟峯

和 歌

○夕がほ……斗 牛

○花筐……告 天 子

俳 句

○曙會詠草……

○蓮の浮葉……

○牡丹十句……白 水

○ゆく春……告 天

○四高俳句會吟草……落 英

○蚤五句集……

○紫雲子を送る……紫 芙 影

○金城を辭す……紫 雲

雜 報

○時習寮の過去現在未來……河 合 生

○北辰會各部管見……河 合 生

○行軍記事……河 合 生

○從軍餘録……か、り、生

○庭球部報……

○第十回春季水上運動會記事……

○寄贈書目……

北辰會雜誌第四拾四號

論 說

眞の宗教は個人の心情にあり

千田 流兒

聖者キリストは吾人に教えて、天國は近づけり、爾自らの心情のうちに神の國來るを省すやと。即ち是れ吾人が自己の信仰を強うし、個人自らの宗教を立て、こゝに天國は活ける吾人が心靈に現はるゝの謂にあらずや。げに吾人が最も純粹に最も單一に自然と人生との問題を究めむと欲せば、かならずや、吾人は先づ個人の進む處について、それが無限の偉大と絶對の眞實とに省みる處なくむばあらず。吾人は茲にキリストの教と佛陀の教との既に枯死せる眞理、教義の如何について謂ふを欲せずして、唯吾人が活ける個人の信仰と自己の宗教とについて多少確かむる處あらむを期するもの也。即ち詩人キーツの言「吾人自らの脉搏の上に試みられたるものにあらざれば、公理も公理と謂ふを得ず」と云ふに由來し、信仰の證權が全然個人の情意に存し、個々に吾人凡べてが個々の信仰によりて自らの宗教を念じつゝあるを謂はむとするにあり。

吾人が活ける信仰と思想とは一切神と世との創設者たり、偉大なる個人の威力吾人に存するに

よりて、貴ぶべき個人の自覺の吾人に許認するによりて、佛陀の教理とキリストの眞理とはこゝに吾人の力となり、強さとなり、生命となる。佛陀の教を云ふ以前に、キリストの教を謂ふ以前に、吾人は先づ恆に自己の何物なる乎を考へ、自己の執る處と自己の向ふべき處と自己の求むべき處とについて最も切に最も鋭く省みざるを得ず。是れ吾人が眞の生命、理想なると共に眞の吾人が宗教ならざるべからず。誰か個人の意力を棄てて自己の心情を捨てて人生と自然との歸趣を謂ひ得べくや。今の所謂宗教家多くは濫りに偏小なる思想に倚り、吾人本然の主義を解する能はず、吾人本來の價値を悟る能はずして、強いて個人の觀念を呪ひ自己の意情を卑ふす。されば宗教道德を云々する者の誤見、矛盾實に嗤笑に堪えざるものありて存す。彼等が自ら強いて其矛盾を蔽はむとし、こと更に其誤謬を潤飾せむとするに汲々努むるの醜亦見るに忍びざるものあり。自己の觀念を忘れたるの結果、個人の意情を棄てたるの結果、眞の偉大と活動とを知るに由なく、宗教道德の眞の目的を誤り、遂に虛妄となり、形式となり、墮落となる。個人の以外に眞の宗教あるなく、眞の信仰あるなく、畢竟自己なき處、偉大も活動も事實も一切虛妄のみ。即ち知る、自己に省みるは是れ吾人が所謂眞の宗教にて、自己を偽り自己を枉げて豈眞の信仰何處にありとなすべけむや。自己の觀念及び個人の自覺は眞の宗教眞の信仰の謂にあらすして何ぞ。吾人本然の要求は是れ死せる眞理と信條とにあらすして現に吾人自らの問題たり。

時は遠く三千年の昔、恆河の邊り、迦毘羅國の太子悉達多是淋しく人世問題の瞑想に耽り、終いに生死の大海、無明の暗夜を照すべき光明を得、太子一生の本願圓滿して茲に寂滅爲樂の大涅槃

に入り給ひぬ。吾人は固より佛陀釋迦の偉大なる無上正覺の解脱を慕ふ。されどそれは佛陀の經典と教理とにあらすして、彼れ自らの信仰にあり、彼れ自らの力にあり。宗教とは文字にあらす、祈禱にあらす、懇願にあらす、實に偉大なる心情の云爲其物なり、活ける人格の意力其物なり。佛陀の教を信せむものは先づ佛陀の心情と人格とをその生ける個人の意力と威權とになさざるべからず。即ち佛陀の眞理を説く前に、そが信仰の力を吾人が血と肉とに張らしめて、こゝに始めて吾人は眞に佛陀の教に入るを得べき也。教理と説法とは即ち是れ後の結果のみ、たゞ意力と權威とは眞に宗教の第一義なり。噫偉大なる自己の信仰及び個人の宗教を措いて、果して何處に佛陀の經典ありと謂はむ、佛陀の教義ありと謂はむ。聖者キリストや世の榮耀、虚偽を懲しつゝ自由を以て天國に上るべき教を説き弘め、自ら神の子と稱して、國人に呪はれ遂にエルサレム城外カルヴァレーの丘上、十字架に磔せらる。吾人は固よりキリストの四福音と教理とに深く敬愛の念を有すと雖ども、吾人は更に彼れが國教と國人とに拒みし信仰の偉大を讃美せむと欲す。即ち四福音に現はれたるキリストよりも、そが生息せる彼が活ける血と命とこそ眞に偉大なれ。キリストや逝いて二千年、彼れが眞理は吾人が眞理となり、吾人が眞理はキリストの眞理たり得べくや。是を以て今に於てキリストの眞理を説きキリストの教義を謂ふはまた何等の得る處ぞ。吾人は自らの意力により天地自然の靈感到觸れ、吾れの此處にあるを覺わつゝ、吾人は始めてキリストの愛にいだかれ、天國と等しきもの、近く吾が心情の中に永はに現はるゝ也。吾人は恆に偉大なる佛陀の説く處を慕ひ、偉大なるキリストの教えし處を貴ぶ。然りと雖ども佛陀の説きし處い

かに偉大なりとするも、佛陀の説法はたゞ佛陀にあつてのみ意義あり、價值あり。等しくキリストの眞理はたゞキリストにありてのみ生命あり、眞實あり。即ち佛陀の説法とキリストの眞理とは、何ぞ直ちに吾人が活きたる力となり、活きたる強さとなり得べき。思へ、釋尊や既に死せり、キリストや業に逝けり。かくしてその説法又何處に求むべき、その教理將た何處に存すべき。是を以て佛陀の經典とキリストの聖書とはただ物の片影の如きのみ。今に於て釋尊の説法を唱へ、キリストの教理を誦ふは、畢竟吾人にありて無意義のみ。宗教家、何によりて佛陀の經典を説き、キリストの教理を云々するや。吾人の活きたる力と強さと勇みは實に唯今日のものによりて、唯此處のものによりて定めざるべからず。吾人は正さしく今日此處に活く、即ち現に吾人の問題は今日、此處の問題なり。あゝ、力なき經典と聖書、血なき説法と教理、肉なき偶像と摸型、是れ吾人が力ある信仰と活きたる思想とに係はると夫れ幾何ぞ。かくて吾人は吾が信仰及思想が自ら活き、自ら求め、自ら動く云ふとき、吾人の用ふる詞がいかに粗漏なりと雖ども、尙吾人が信仰及思想の一般を稍充分に知るに難からざらむ。

あゝ今の世と人、何ぞ自ら個人の信仰、宗教を省すして、徒らに經典を誦し聖書を唱するや。若し自ら信仰の由る處を個人に自覺して、何等熱き誠なく單に佛陀とキリストの前に跪くものは、是れ自を欺き自らを伴はる者にあらずして何ぞ。若し亦自ら個人の信仰を自覺し能はず、唯々念佛祈禱を以てそが宗教となさば、吾人はその愚を憫はれむべしとなす。所謂宗教なるものゝ意義してかくの如く徒らにたゞ枯死し果てたる經文、教理を強ふるものたらしめば、吾人は所謂宗教

なるものゝ職能に大なる疑惑を存せざるを得ず。活きたる信仰と憧憬とが内に動きつゝある吾人に枯死せる經文、教理を以て、信仰の威力を遮ぎり、思想の自由を枉げむとするも、そは斷じて不可能にて、結果は唯虛妄となり、墮落となる。久しい哉、宗教家の賢なる自覺に就くを得ざるもの。自覺に乏しき宗教家は唯々佛陀の經文とキリストの教義とを全然そが信仰に移し得られたるが如く思惟し、何事もその云爲する處は、佛陀、キリストの説く處のまゝの如く思慮するも現に其信仰する處も其云爲する處も佛陀其人を離れ、キリスト其人を離れ、實際個々に自己の宗教を得、個人の信仰の上に立てるや、恰んど多く述ぶるを要せずして自明ならむのみ。佛陀の生命と、現在吾人の信仰とは三千年の時と三千里の處とによりて相隔てらる。吾人今日の信仰、生命は何ぞ佛陀の過ぎにしそれに比すべくや。もし吾人にして佛陀の教を知りしものを世に求めなば、唯佛陀其人を外にして求む可からず、もし亦吾人にしてキリストの教を信するものを世に求めなば、たゞキリスト其人を措いて他に求むべからず。よしや吾人が佛陀キリストと或る等しき一の信仰を得たりとするも、其信仰が活くる以前に、其教理が熱き血によりて力と強さとをうくる以前に、吾人自らの思想が是を許容し、個人自らの意力となり、信仰となり、宗教となり、而して後始めて然かるにあらずや。即ち知る、所謂佛教徒と稱し、キリスト教徒と稱する者夫々等しくその標榜する處は各一なりとするも、實に是が信仰の内容に至りては、個々の信仰に分れ、個々の宗教に岐たれ、頗る意外なるものあらむ。是を以て佛陀の説きし處がたゞ佛陀其人によりてのみ唯一の意味を有し、キリストの教えし處がたゞキリスト其人によりてのみ完全なる旨義を有す

と云ふ所以こゝに至りて明かならむ。

まことに佛陀釋迦の尊き説法は、その生命とその人格とによりて啓かれぬ。されど彼れの生命と肉とは既に死せり、而して活きたる佛陀の信仰、宗教亦ともに滅し去らざるを得むや。聖者キリストの貴ぶべき眞理と教義とは、その肉の死と共に十字架の上に露と消え去りたりき。既に佛陀の眞の信仰と共に活ける佛陀の教は滅し、佛陀の死滅が直ちに佛教信者の死なりとせば、所謂佛教徒と謂ふものそれたゞ名のみにあらずや。己にキリストの眞理と共に活けるキリスト教は亡び、キリストの死者が、やがてキリスト教信者其人の死なりとせば、所謂耶教と唱ふる處のもの、逝ける宗教にあらずして何ぞや。たゞ經文を手にし念佛を口にするも、必ずしも佛教徒と謂ふべからず、聖書をよみ讃美歌を誦するも、眞に之をしもキリスト教徒とするを得ず。今の世と人、最も畏敬し、最も崇拜するものは、即ち經文と聖書と、乃至凡ての形式なり、習慣なり。人はすべて偶像と經文との前に跪づくこと、勝者の前に降る敗者の体に異ならず。もし偶像の前に跪づかず、經典を誦讀せざらむか、直ちに異端と呼ばれ、下道と罵らるゝ也。佛陀の教を口にし、キリストの教を説いて、而かもその信する處は唯形式と習慣との外に出でず。宗教を云ふ者、道德を説く者、その思想のいかに陳腐し、その意情のいかに老退せるかを見すや。吾人は佛陀とキリストとを口にせざれば、吾人は遂に彼等の所謂信仰の人にあらざるなり。所謂宗教と道德との外に天才あり個人あるは彼等の知らざる所なり。かくの如くにして天才の事業と個人の心情とは讒謗と罵詈雑言を以て、其苛責をうけ、吾人が眞の信仰及眞の宗教は永しへに迫害せられつゝあり。是に

於て、若き意情は罰せられ、新らしき思想は罪せられて、吾人本然の進歩と憧憬とは凡て罪惡と非道の名によりて排けられぬ。

人は凡て、個人の清き信仰を棄てたる結果、自己の強き心電を忘れたる結果、熱烈の誠意を欠いて、嘲弄となり、冷笑となりぬ。世はすべて自分の意情を省みざるの結果、形式は萬能となり、盲動は禮拜となり、習慣を教理と謂ふ。活きたる吾人自らの信仰を捨て、徒らに禮拜をのみ強ふる者は、死せる説法が若き意情のうちに蘇るべからざるを未だ知し得ざるに似たり。佛陀とキリストとの名にのみ戀々たる、血も肉もなき佛像を禮拜すると何の撰ぶ處ぞ。實に個人の作爲する信仰にして始めて、吾人の生命となり、力となり、理想となる。即ち自らの信仰は是れ活きたる神なり、生きたる眞理なり、更に肉ある佛陀なり、血あるキリストなり。吾人が自らの信仰を悟り、自らの宗教を知るは即ち是れ吾人の眞に活くる也、進む也。經典も聖書も吾人自らの信仰を俟て、こゝに始めて意義あり、價值あり。是に於て乎、個人の信念を離れて、何處にか佛陀の教あらむ、キリストの教あらむ。あゝ個人の意情なき處、何處にか威力あらむ、偉大あらむ。

それ佛陀の教理、キリストの眞理にして絶對的、統一的のものたらば、時と處とに論なく、恆に等一なるべき理なり。然かるに等しく佛陀教にして、或は等しくキリスト教にして、相角逐して所謂宗旨争ひなるものゝ熄む時なく、凡て宗教の過去は變遷分裂の歴史なり。もと宗教の發展、進歩はそが教義の性質いかゞと、そが社會の風情いかゞとに涉るべきに由り、一の教の下

に幾多の分岐を生じ、幾多の變遷を経べきは、時と處とによりて亦已むを得ざるなり。こは是れ吾人が眞の信仰はたゞ個人の心情により、時と處とに現はる云爲其物たるを主張する所以にして、個々の宗教が夫々個人のうちに存するを信する證據たり得べし。而してこの分岐とこの變遷とは拒却せむと欲して、遂に得べからざるべきは論を俟たず。然るを何處迄も自覺に鈍き宗教家は、分岐によりてその信望を失ひ、勢力を削がれむを苦慮し、あらゆる辨解と謝辭とを弄するの醜は却て冷笑となり、罵詈となる。而かも眞に事實はかゝる辨説を以て蔽ふ能はざるを如何にすべき。もし等しく佛陀の教を稱する者をして、悉く思ふが如くに其所信を吐露せしめなば、其歸依する處會々佛陀の教に等しからざるべく、夫々觀想の異同懸隔思ひ半ばに過ぐるもの甚だ多からむ。吾人はこゝに想及する毎に、強いて佛陀の教と謂はずして奚ぞ自らの教と稱へざるかを怪まずんばならず。試みに見よ、佛陀が教を説いてより、非常なる速度と勢力とによりて、北方印度に傳播し、更に唐に入り、三韓に入り、終ひに轉じて我が邦に敷かる。此間幾多の變遷を残しつつ大化以後に六宗となり、平安朝に入りて天台眞言の二宗を加へて八宗となり、足利時代にありて十宗となり、次に徳川時代に至りて十八宗の多きに及ぶ。キリスト教に於ても分裂の多きもとより謂ふをまたず。即ちトリニティとなり、アリアリズムとなり、更にネストリユスの反論となり、遂に羅馬教と希臘教との分裂となり、後續いて幾多の變移と改革とを経て今日に及ぶ。かくて亦オルソドックスとプロテスタントとは果して同一の教義と信仰とを有すと謂ひ得べくや。形式及び習慣とについてその異同を辨するを要せず、現に夫々信仰の上に多大の離隔を見出

し得べし。分離は更に分離となり、革新は次いで革新となり、恰んど徹底する處なく、時と處とに従ふて、吾人が個々に欲する處、求むる處の等しからざるべきを如何にすべき。是を以て分岐離隔は單にオルソドックスとプロテスタントと云ふに留まらず、更に幾多の分岐分裂と處により、當然の變移に觸るゝがため、眞の信仰は會々個人の心情に存すべきを見るなるべし。而して信仰の活潑なる進歩あるに従ふて思想上の分離は愈顯著なる所以亦是により明かならむ。佛陀の教を遵奉する者、論すれば自らの理想のなす處にあらずや、自らの理想と意情とを移して以て佛陀を釋し、經典を知るにあらずや。吾人が夫々自己の所認によりて、立つべき者たるは、是れ即ち個人の意情によりて佛陀の教の存する所以にして、分裂、離隔は即是れに始まる。傳説、形式、習慣を唯一の歸依として、敢て訝ることなき時にありては、一致は期せずして存せむと、漸く復離は分離となり、疑問は批判となるに至らば一致は遂に得て望むべきにあらず。即ちかの形式と煩瑣とに反抗しローマ法王の威壓を離れて、ルーテルが自由と光榮とを個人の心情に興へ、プロテスタントの勃起するや、その發達は分離の發達なりき、其傾向は分裂の傾向なりき。吾人心情の自由は始めてこゝに漸く自覺せられぬ。

故に宗教が時と處とを超越し能はざる以上は、その動搖變移は到底免かる能はざるべきなり。かくの如くにして吾人は時と處とを分ち考へ、追論してこの傾向を類推し來れば、一致の上に一致あり、分離の下に分離あり、畢竟信仰の純粹はくだいて個人の心情に歸すべきを證するに至り得べからむ。是を以て、吾人が眞の宗教と信仰とは、其時其處に現はるる生命、理想、進歩によ

りて自ら明かなり。是れ活きたる生命なり、生きたる理想なり。即ち世に於てあらゆる云爲、活動の中心たるべき其物なり。世は即ち是によりて現はれ、人は即ち是によりて活く。

吾人をして次いで個人の心情の無限を證せる聖キリストが偉大を愛せしめよ。聖者イエスが奇跡はユダヤ人を愕かし、漸くパリサイの人々をも慕はしめむとするや。祭司の長等はローマ人の忿りを怕れて、パリサイの人々を呼び集め、イエスを磔せむと議かる。即ちキリストの眞理と信仰とはユダヤの國家を危ふし、その國教を破壊せむとするものにてありき。祭司の長は曰ふて、この國家と國民とがローマの國民によりて嘲侮せられ、強掠されむを欲するか、イエスの謂ふ處の果して何なるやを知るの要なし、唯國家の存否を知るのみと。パリサイの人々は是の日より、キリストを殺し以てローマの國民に訶ね、ユダヤ國の存立を保たむと共に議る。されど偉大なるキリストの強き自信は國家の威權を以てするも、死の畏怖を以てするも、遂に動搖せず、神のものをカイセルのものに代ふるが如きとを敢てせざりき。このキリストが偉大なる信仰は月日と共に昭々乎として永しへに輝き、何物を以て是に代へむとするも、キリスト自らにありて如何とも爲し難たかりしや勿論也。永遠なるべきキリストの信仰にとりて、國家も威權を保たず、死も亦畏るゝに足らざるなり。即ち世と人とは彼に何をなさむとも、彼自らの信仰を措くに處なかりしなり。吾人はキリストの眞理と教義の如何を問ふを要せず、彼れの永遠なる信仰の力を慕はざるを得ず、彼れの偉大なる肉の死を羨まざるを得ず。まこと、キリストこそ自己の信仰の何物なるかを知れり、自己の力の如何に貴ぶべきかを知れり。キリストは殘殺の劍の下に動くことなく、

防ぐことなく、たゞ彼れ自らの信仰に力を強ふして立ちたり。かくて棘の冕を載き、手に草をもち十字架に上ぼり、自ら天父の手により熱き胸に近く抱かれあるを感じつゝ、悠々國家を越ね、國人を超えて、永劫のあなたに夢みたり。

あゝ自己の觀念と自己の信仰となき時、何ぞ偉大ありと謂はむ、權威ありと謂はむ。自己の宗教と自己の眞理となき處、奚ぞ佛陀ありと謂はむ、キリストありと謂はむ。吾人は自ら個人の心情の上に偉大なる信仰の力を示したるキリストの人格を羨望にたへず。キリストの眞理は吾人が眞理となり得べからざるとも、吾人はその信仰の力を欲す。自己の問題は是れやがて永遠の觀念にて、自らの信仰に據つは即ち人世の第一義なり。けに自己の信仰と個人の威權とを屈せざるは人生の眞意義にあらずや。而して是れキリストがその潔き血を以て永遠に證せし處にあらずや。

眞の生命と眞の信仰とは彼れキリストの如き人格を俟つて期すべく、今の平凡なる宗教家の到底想及し得ざる處なるべし。吾人はキリストの謂ひし處を信せず、聖書の説く處を知らず、たゞ吾人の求むる處はキリストの血と肉とを吾が信仰の力とするを得べからむを欲するにあり。あゝ今の宗教家何ぞキリストの血と肉とを謂はずして、其眞理を説き、其教義を云ふや。勿論キリストの眞理と教義とは彼れが心情より溢れ、彼れの意力より漲れりと雖へども、こは以て眞に吾人が信仰を促すものにあらず。まづ吾人をしてキリストが肉の死のいかに偉大なりしかを慕仰せしめよ。是れ眞にキリストとコンミニュケートとする唯一の途にてある也。かのパンをとり、ウーインを飲み以てキリストの肉を吾人が肉とし、キリストの血を吾人が血となすと云ふは甚だよし、さ

れども余りに形式に擬せられたるを亦如何。須らく、吾人は自らの信仰によりて眞にキリストの肉と血とを知らざるべからず。即ち吾人の欲する處はキリストの血と肉とによりてなされたる偉大なる力にあり、強さにあり、勇みにあり。其眞理を讃美するを要せず、其傳説を畏敬するの用なし。吾人自らの信仰は其眞理を疑ひ、其傳説を信せず。疑問と不信とは是れ自らの力によりてなされざるべからず。げにや、自らの力によりてなされたる疑問と不信とは、是れ自己の宗教なり、自己の生命なり、自己の進歩なり。即ち活きたる吾人の疑問と煩悶とは、是れ實に、眞の宗教と知らずや。

迷へる世と人よ、自己の心情によりてキリストの教を顧み、自己の信仰によりて聖書の眞生命を疑へ。一切の罪惡と墮落とを救ひ、後活と光明とを啓かむは、唯自らの意情の力を奮ふて、自己の信仰を肉とし、自己の宗教を活かしむるにあり。かの偽り多き形式をすて、自己と個人とを純粹に觀念するは是れ即ち眞面目なる宗教に入るの謂なり。換言せば、自己の宗教と個人の觀念とを生命とし、意情とする者にして始めて眞の信仰の人となり得べく、力強き血汐は其情意に狂ひ、うら若き歡喜はその胸に躍り、永はに新鮮なる力と勇みとを活かしめて、健闘と向上と進歩とを吾人の生命とし、理想たらしむるは、即ち吾人か所謂自己の宗教にあらずや。實に吾人自らの宗教は處と時とに現はれ來る吾人の生ける理想なり、活ける生命なり、進歩なり。即ち吾人は自らの理想、生命の最も強きもの、力あるものを以て、永遠に個人の心情を發展し、永久に自己の意力を證せむか。イエス、キリストが十字架の上に清き血を瀝ぎ、「我もし地より擧げられな

は、萬民を我に就せん」と叫びしは、彼れ自らの強き心情と信仰とによりて始めて意味を示すべきにあらずや。實にキリストの教が今日あるは、彼れの説き給へる眞理にあらず、聖書に含めるにあらず、キリスト自らの強き信仰と意力との致す處、眞理と聖書とは、彼れ自らの人格より響ける甚だ淡きもののみ。残れるキリストの教は彼れの人格によりて、始めて眞の生命を吾人の熱き胸にもたらせり。偉人なる個人の力は吾人の所謂自らの宗教に現はれ、あらゆる世と人と物とは茲に自己を意味し、個人を説き、自由を示すべからむ。即ち一切の世と人とは個人の信仰を得て、自己の宗教を俟つて、ために始めて活動あらむ、光榮あらむ。

あゝ憂ふべからずや、活きたる理想を灰とし、生きたる進歩を死せしめしは、眞に個人の宗教を棄て、自己の信仰を忘れ、徒らに朽ち果てたる經典、聖書を貴ひしがためにあらざりしか。漫りに偽りの道徳を説き、朽ちたる宗教を謂ふものは、是れ正さしく活ける人世を呪ふ者にあらずして何ぞ、若き情意を詛ふものにあらずして何ぞ。見よ、道徳を説く者、宗教を謂ふ者のいかに活動なく、力なく、強さなく、勇みなく、哀れむべき迄に頑迷に、卑劣に、且つ醜陋なることよ。かくしく魯鈍と頑迷とは彼れ等の道徳となり、畏怖と卑劣とは彼等の宗教となれるを見ずや。あゝ若き血汐の胸に泡立つ者は、あらゆる自己と個人との強き力を揮ふて立ち、このみにくき道徳を粉碎し、この頼むなき宗教を亂打せざるべからず。宗教も道徳も唯個人と自己との力によりてのみ意義あり、價值あり、存在あり。即ち個人の心情によりて、吾人は人世の進歩を得たり、活動の發展を得たり、信仰の保證を得たり、佛陀の信仰とキリストの人格を別にして、吾人は所謂

佛敎とキリスト敎との存在を疑ふと云ふこと、要するに是れに所因す、是に於てか、吾人は今日の所謂宗敎を棄て、新らたなる個人自らの信仰によりて、心情の自由を得、限りなき人格の發展を期せざるべからず。即ち吾人の所謂眞の宗敎、眞の信仰の歸する處は、吾人本然の心情の威力を、飽くまで強め、吾人自らの意力を奮ひ、吾人が呼吸を永遠と無限とに浮ばしむるもの、即ち是れなり。再言せば、吾人の所謂宗敎は、死せる敎えにあらずして、活ける個人の靈を信じ、進む自己の力を展ぶるによりて存す。卑劣、躊躇、迷妄等凡べてあらゆる醜の醜をつくせる世の宗敎家は貴ぶべき自己及個人を忘れて、讀經、祈禱によりて信仰の表章となす。讀經も念佛も何かあらむ、聖書も祈禱も亦何かあらむ。キリストのキリストたり、佛陀の佛陀たるは、彼れの四福音にあらず、是れの經典にあらず、個人の熱烈なる意情にあり、自己の威力ある信仰にあり。遂に吾人は自己の信仰及び自己の宗敎を謂はざらむと欲するも、豈亦得べしや。凡て如何なる時にありても、如何なる處にありても、自己の信仰と個人の觀念とより絶縁して、吾人は眞理も眞理とし得ざるべきや勿論、自己の信念は直ちに眞理其物たるべきを信ぜざるを得ざるなり。されば佛陀の敎もキリストの敎も唯吾人の心意よりして、單に光の反射屈折の如く、音の共鳴、反響の如けむのみ。苦し吾人自らの信仰が直ちに眞理たらずむば、眞理なるものゝ始めて無意義のものとなりたる可し。これを以て、吾人は個人の信仰、自己の觀念よりして眞理が始めて嚴密なる意義を有するものたるべきを知らずむばあらず。吾人の求むる處、進む處、爾かくたい自己の信仰と個人の意情とにあれば、形式と禮拜とになつむことの甚だ要なきものたり得べきや、勿

論なり。

吾人は思想の新らしき發揮と自由とを、吾人自らの信仰によりて、自らの宗敎によりて主張せむと欲す。即ち吾人は自らの信仰の動くに任かせて、其自由を妨ぐるあらば、其發揮を拒むあらば、吾人の限りなき意力を奮ひつゝ、迷妄を挫き、誤謬を屠らざるべからず。亞刺比亞人が血滴る干戈を提げて「コーランか、歳貢か、將た劍か」叫びしは即是れなりき。日蓮が攝受折伏の利劍や旌旗とを執りて、彼自らの信仰を誇りしは亦即ち是なりき。要するに個人と自己とを讃美し、主張せむとするは即ち是れ人世の存在なり、意義なり。その偉大と光輝とを、永しへに示さなむ。蓋し活動、傲慢、強奪、破壊、奮闘は自己と個人との威力のある處、躊躇、逡巡、姑息、靜穩、凡庸は個人的心情の住む處にあらずして、眞の信仰を伸ぶる所以にあらざるなり。是れ亦吾人の所謂自らの宗敎か熱烈なる意情を有し、強力なる活動を有し、且つや、青春の理想と血汐とを其生命とする所以なり。既に吾人は個人の自由と活動とを限りなく求む、故に破壊と強奪と健闘とは生命ならざるべからず。今や人心の平温、薄弱、卑屈、墮落は自己の自由を悟らず、個人の心情を呪ひ、所謂道德及宗敎なるものと醜陋、吾人遂に黙するに忍びず。あゝ誰か是を鞭撻し、是を叱責する者ぞ。無限なる青春の活力を鼓舞し、新らしき力と勇みとを得む者は、まづ信仰の自由と思想の發揚を謂はざるべからず。即ち自己の中に偉大なる神命の囁きをきき、無限の威力を覺て、吾人はこゝに始めて眞の宗敎を謂ひ得る也。

かくて世は吾れを語り、人は吾れを憎むとも、吾れ自らにありて何の係はる處ぞ。憎む者をし

て、欲するがまゝに憎ましめむ。罵る者をして、欲するが如く、罵らしめむ。平凡なる道德家と薄弱なる宗教家とは吾人に卑屈、阿諛、陋劣を強ふるも、吾人自らの強き力は遂に熱くして熄むべからざるを如何にすべき。吾人は寧ろこの平凡なる世と人との惡魔の力を揮はむ、蛇蝎の毒をためさむ、これはこれ自己の驕傲なる威力が勇むに於て、亦如何ともすべからざるなり。自由を理想とし、破壊を精神とし、自己と個人との力を永遠と無限とに證せむか。個人の強き力を揮ふて吾人はこの平凡なる道德家を戰慄せしめ、この醜劣なる宗教家を怒喝せむとす、かくて吾人は眞の信仰が個人の心情によりて強めらるゝを覺ゆ。平凡と虚偽とを懲して、理想の渴仰に狂へる者は、まことに偉大なる哉。キリストも日蓮もバイロンも共に狂者と呼ばれたりしにあらざりしか。世は如何にありとも、人は如何にありとも、キリストや、日蓮や、バイロンや、たゞ自ら偽りなき自然の力に従ひしのみ、自己と個人との憧れたる強き情意は、遂に狂せずしてやむべからざりしなり。即ち平凡なる世の人とに交はり、その熱烈なる血は怒らざるを得ざりしなり。こゝに眞の偉大なる信仰は時間と空間とを超越し、自然の天真は現はされざりしか。吾人の所謂個人の自覺が遠からずしてこの平凡なる道德家を恐れしめ、この懦弱なる宗教家を愕かしむるの時來らむを、吾人が切望するや久し。吾人は烈狂と動亂と反抗とを歡ぶ者、若き意情と新らしき思想とは、かならずや、是れによりて、個人の權威を高め、吾人が眞の信仰を更らに強からしめざるべからず。吾人は遂に其の信仰を立つべく、道徳と宗教とに反抗、破壊を要ひざらむと欲するも、豈亦得べけむ哉。墮落せる道德家、宗教家の平凡、醜陋を救ふべく、吾人心靈の十字軍を起

さすむば、個人の心情と眞の信仰とを將た何處にか措くべき。主觀を没し、個人を棄て、本能と意情とを觀ざるは、平凡なるこの道德なり。自己を妨げ、自由を害し、あらゆる天才を呪ふものは、頑迷なるこの宗教にあり。かくて吾人が心情を展ぶるに處なく、吾人が信仰を恣にするの時なく、畢竟吾人が活ける力は、永しへに窒息せざるべからざるか。是に於て眞の信仰を説き、眞の宗教を謂はむ者は狂と嘲けられ、罪なりと咎めらる。世の所謂宗教の墮落、平凡は永しへに個人を毒し、自己を害す、吾人は是を黙せむとするも、豈にまた痛嘆にたゆめけむや。奴隸と偽善とは遂に吾人が活きたる進歩にあらず、理想にあらず、吾人の意味に於て、人世のあらゆる發展と活動とは道德、宗教によりて杜絶されたり。人世の向上を望み、眞の信仰を活動せしめむがため、須らく遵守せる道德も宗教も問ふを要せず、そが瓦解も破滅も敢て惜しむに足らざる也。是を以て吾人に道德の威權を説き、宗教の尊奉を謂ふ者は、甚だ愚かなり。たゞ歸すべきは吾人が所謂個人の威力と自己の信念にある哉。平凡なる道德家と墮落せる宗教家とを觀て、吾は憤懣の情にたねす、大いに自己と個人との心情を驅りて、惡魔の力と百鬼の猛とを揮はむとする所以、實に茲にありて存す。

吾人はたゞ嬰兒の如くに、自己の欲するがまゝに求め、自己の望むがまゝに任かさむ。是れ實に吾人が心情の最も純白にて、眞の生命の美なり。吾人は嬰兒に於て最もよく個人意情の發動を見るを得ん。即ち眞の信仰を得、眞の宗教の門に立たむとする者は、須らく嬰兒の心情によりて、活きざるべからず。キリストの弟子等彼れに來りて天國に於て最も大なる者は誰なるかを問ひし

とき、キリスト曰ひけるは「我れまことに爾曹に告げん、もし改りて嬰兒の若くならずば天國に入ることを得じ」と。實に嬰兒にありては道德の威嚇も宗教の尊嚴も何かあらむ、たゞ飢えては泣き、歡びて笑ふ、是れ眞に自然のまゝにあらすや。吾人の所謂個人の心情なるものは、即ち嬰兒の泣き、笑ふが如きのみ。即ち是れ自然の力が限りなく活くるの謂なり。吾人をしてただ意の動くにがまにまに、心の求むるに任せて天真の美しき力に呼吸せしめよ、たゞ嬰兒の笑ふが如く、泣くが如くに。自然のこの清き力をしらず、嬰兒のこの慕ふべき美をしらざるもの、吾人が所謂眞の信仰、眞の宗教に與かりしと能はざるやもより、凡べての墮落、卑劣は亦是によりて始まる。あゝ、痛ましい哉、憎むべき世と人どが無垢の嬰兒を誘ふて汚辱、罪惡に導びき去らすむばやまず。仍りて個人の心情と自己の信仰とは墮落に陥り、道德、宗教のため個人と自己との美しき心情を凡べて犠牲に資せざるべからず。吾人が清き自然の力は、たゞ空飛ぶ鳥の歌ふが如きのみ、野に花咲く百合の如けんのみ。榮華の權威も道德の威嚇も、是れに及ばざるや甚だ遠し。吾人が自然の大なる力に歸るべきは、是れ人世に於ける意の第一義たるべきを信せずむばあらず。かくて吾人は衣のことを思ひ煩ふを要せず、防ぐことを要せず、たゞ靜かに空行く雲に吾が想ひを漂はせ、流れ逝く水に吾が心を浮ばし、獨り自然の悠々たるに任かさば、吾人心靈の中に唯々強く聲するものを聞かむ。知らや、ソロモンの榮華の極みも、遂に野の花の一つにだに及ばざりしを。然れば道德の如何と眞理の如何に多く思ひ煩ふをやめて、自ら顧み、自ら愛し、自ら誇るべきなり。自然の絶對も人格の偉大も、たゞ是により、俟つべきのみ。吾人は飽く迄、吾人が意

の如くに、欲するがまゝに求め、且是を得ずむばやまず。

吾人自らの信仰はかくて永遠と無限とに放逸して、大なる自然の力と美とを、すべて個人の心情に溶かし得たり。即ち吾人自らの威大は無限と萬有との上に溢れて、以てキリストと等しきものを自らの意力と信仰とに認め得たり。即ち是れに於て、キリストの強き血と力とは、吾人心靈の中に永しに復活し得たり。かのく如くにして、吾人が心情は神と人とを一にし、萬有と無限とを統べ、時と處とを超えて永遠に夢めむ。まことに天國は吾人自らの心情と意力とによりて啓かれ、吾人心靈のうちに潛みたりし大なる聲は無限と永遠と萬有とに強く響くを聴く。吾人が自らの力に絶對の威權を認め得たる時にありて、世の所謂宗教亦何かあらむ、人の所謂道德何かあらむ。かくて吾人は唯個人の意力と心情とを辿りて眞の宗教を得、眞の信仰を得たり。たゞ夫れ吾人を活かしめ、吾人を神たらしむるもの、自己の宗教と自己の信仰とを外にして、將た何處にありと謂はむ。あゝ自らの信仰なる哉。自らの心情や貴い哉。

嗚呼、久しい哉、今の宗教家の平凡、頑陋が自己と個人とを呪ふて、漫りに自らの心情を偽り粧ふことの。ために自己の宗教に自覺の確信を誤り、たゞ念佛と祈禱とのみ貴ばれ、個人の權威と自己の意力とは剝奪せられて、徒らにみにくき奴隸の如くに跪づく憫れさ、終ひに救済の途つきたるか。吾人は卑屈なる宗教家の爲すが如く、濫りに跪づくを欲せず、祈るを欲せず、誓ふを欲せず。たゞ吾人に頼むべき自己の意力と、依るべき個人の心情とあるのみ。(終)

雜 錄

若 草 (前號つゞき)

み、

(二十) 大伴の旅人と仰せらるゝ御方は、猩々イヤ少々御酒のすきな人と見えて、酒讃歌といって十三首萬葉集に載せてある。ついでに記しませう。正宗や白鹿にもまざった酒味、ホイシタリ何さ趣味があるでせう。よつて宜しく賞玩したまへと申す。

驗なきものをたもはずばひとつきの濁れる酒を飲むべかるらし
酒の名をひじりとねほせし古のたほき聖の言のよろしき

いにしへの七の賢き人どもとほりするものは酒にしあるらし
賢しともいふよりは酒のみて酔ひ哭きするし勝りたるらし

いはんすべせんすべしにきはまりて貴きものは酒にしあるらし
なか／＼に人さあらずば酒壺になりにてしがも酒にしみなむ

あな醜くさかしらをすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似る
わたひ無き寶といふとも一杯のにこれる酒にあにまさらめや

夜光る玉といふとも酒のみて情をやるにあにしかめやも

世の中の遊びの道にさぶしくは酔ひなきするにありぬべからし

この代にし楽しくあらばこん代には蟲に鳥にもわれはなりなむ

生るれば遂にも死ぬるものなればこのよなるまは楽しくをあらな

もだし居てさかしらするは酒のみて酔ひなきするになほしかずけり

ハ、大した悟りやう。萬葉集中の樂天家、けだしこの人たるべし。

(二十一) 天曆の御時、月次御屏風の歌に擣衣のところに、兼盛詠みていふ。

秋ふかき雲の雁の聲すなり衣うつべき時やきぬらむ

紀時文、件の色紙形をかくとき、筆をえさへていはく、衣うつを見てうつべき時やきぬらむと詠するいかゞ、兼盛にやがて尋ねらるゝところに、申していはく、貫之が延喜御時、同屏風に駒迎のところに、

逢坂の關の清水に袖ぬれていまや引くらむ望月の駒

と詠す。この難ありやいかゞ、時文口を閉づ。しかも時文は、貫之が子にてかくなむ謗りける、

いよ／＼淺かりけり。(古今著聞集)

(二十二) いま現に生きて居らるゝ人で、その著のうちにある人々らの詠歌を難じたものがある。

その筆鋒のあまりに鋭かった爲め、當時の歌壇、はなそれ以上にまでも影響を與へて、新聞などにも随分とやかましい議論があったとやら。事は今より十數年前なり。其の中の一つを示さむに、

鶯 春くら春來にけらし………神代以來わが國の歌には、かゝる句格なし。冬こそ春來にけらし、

梓弓春きにけらし、打ちなびき春きにけらし、から衣はる寒にけらし、かげるひの春來にけらし、例をいはやくの如し。……………久片の空はかすみぬ白栲の雪は消行春くらし春來にけらしうちかをる垣根の梅に鶯啼くも

某氏早く和歌改良論をいだせり。其の文に、歌はこむつかしきことをいふに及ばず云々と書きて、改良歌の自詠數百をあげけり。其の書は火災に焼け失せて、心にもとめねば大方は忘れたり。先づ其の一つ二つをいはむ、「きら／＼と破れ障子に月さして風はひう／＼狐きやむ／＼」「いねむりの夢ではないか時鳥はむとうに聞くあれあの聲は」「かく詠むべきものぞと示されたり。數首みな此の體なり。これ氏が得意とする所なるべし。長歌も春くらし春來にけらしといへる初二句を見れば、即ち改良せられたるものならむか。されば論にかゝらず。

反歌 火桶いだし北窓とちてこもりしはきのふなりけり鶯の聲「結句の鶯は突然なり。鶯から棒のやうには非ずや。

改良論によれば、初句火桶いだしとあるは詞みやびにて、いやしきを好む氏が口つきにも似げなしといふべし。某々改良歌のよみざまは知らねど、初句を火鉢だき、二の句を北窓しめて、三の句を居たりしは、四の句きのふであつたに、結句を鶯がなくとしてはいかゞ。

火鉢だき北窓しめて居たりしはきのふであつたに鶯がなく

改良の歌はかく詠むべき趣意ならずや。鬼神も笑ふべし。

(二十三)亡父成章いふ。たなばたは星の名なり。七夕はなぬかのゆふべなり。たなばたを七夕と

書くべからず。萬葉集にもなぬかのよひと詠めり。俗にたなばたとよむこと、其のいはれを知らずとぞ。(北邊隨筆)

ほんに左様だ、たとへば處女、少女、未通女など書くべき所へもっていつて、乙女と書く、其の何の故たるを知らずだ。

(二十四)土御門殿にて、三十講の五卷、五月五日にあたりしに、

妙なりやけふは五月の五日とて五つの巻にあへる御法も(紫式部集)

(二十五)家隆卿、七十七になられる年、七月七日九條前内大臣の許へ遣はしける

たもひきや七十七の七月のけふの七日にあはんものとは

定めて返しありけむかし。尋ねてしるすべし(古今著聞集)

(二十六)取古歌といふ條にあつた、無名抄の文をひく。

……………又御所の御歌合、曉鹿をよみ侍りしに、

今こんとつまや契りし長月のありあけの月にを鹿なくなり

此の歌は、ことがら優しとて勝ちにき。されど定家朝臣、當座にて難せられり。かの素性が歌にわづかに二句こそかはりて侍れ、かやうにたほく似たる歌は、その句をたきかへて、上の句を下になしなど作り改めたるこそよけれ。これはたゞもとのたき所にて、胸の句とむすび句ばかりかはれるは、難とすべしとなむ侍りし。

(二十七)これは、悦目抄のとなり。

古歌をとること第一の大事なり。上手の見ゆることなり。しかあれども、いと上手ならぬ人も、古歌よくとる人もあり。上手のうちにも、古き歌にとらぬ人もあり。此の中に二つの様あり。一つには詞をとりて心を換へ、二つには心をかへて心ながらとりて、詞をかへたるもあり。詞をとりて風情をかへたるはよし。風情をとることは最も見ぐるし。心をととりて物をかふといふは、古今の歌に、

月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず

とよめる、萬葉に、

わが宿の梅咲きたりと告げやらばこてふに似たり散りぬともよし

といへるをどれり。是れは心も詞もかへずして、梅を月にかへたるばかりなり。かゝるたぐひはこれに限らず。詞をとりて心をかへたるはまた同じ。萬葉集などば、本歌とるやうとしもなく、少しかへてよめるも多し……

(二十八)旋頭歌といふものあり。例の三十一字の中にいま一句を加へてよめるなり。五文字をもたい心にまかせたり。加ふる所はよむ人の心にまかせたり。しかあれども五文字の句二つづゝあるは見え侍らず。よまんことも難かるべしといへり……(悦目抄)

(二十九)萬葉は更なり、古今集も古格正しきを、續千載集に俊成卿、

みどり子と思ひし人も老いぬとてそむく世を見るかなしさは夢かうつゝか

此の一首の心定かならぬうへに、五七、五七、五七にて、旋頭歌のしらべにあらず。この歌のか

へしに、隆信、

ありてなき夢もうつゝもいかでかくとはれまし君がみる世にそむかざりせば

これ五七、五七、七七にてたがへり。されど三句めの五を七にすれば、句調はあへれど、旋頭歌の趣意にあらず。そは旋頭の義なれば、上句五七七にていひ切りて、また下の五七七にていひさりて、上へ返らむこと萬葉古今など悉くしかり。よくも見給はずして、旋頭歌は尋常の歌に一回多くして、六句によむことゝのみねもほし給ひつらむ(傍廂)……つゞく……



文苑

彈琴の巻

斗牛

(スコット作アイバンホーの一ふし)

ゆふべかなたのふみよも隅に
銅にふりたるまきくひらく
伊都のいさをし繪ときがしたる
天のむくいをかむれる殉教者の、
かくてともし火に暗うなれば
定めし聖歌を誦してぞ寝ぬる。

× × ×

誰かばこれの奢りをすて、
杖と鼠色の兜巾をとらむ
騒き舞めく此世にかへて
こゝろ平な僧庵を撰らむ。

(アルトン)

氣さくな隠者よりの所望とあれば、心よくはうべなひながら、堅琴を諧調せんは易からぬことと見てとりし客人

「聖のうし、このたて琴には絃も一寸ち足はねば、今ある絃と申しても、なにがしかの損所はござるやうたばりまする。」

(いかさま！御邊はそれをさびき召れしよな、ハテサテ、御邊が力量ある御仁とはそれよりして知れるわ)

隠者はたごそかに眼そそぎて

(酒に宴席！)

と、添へつ

(一切は酒と宴席の科ちや！盃の數も七ツになりて、絃にふれて見やれ、琴が怪我するとナ、アラシと云ふ琵琶法師に魯祐がはなしたことがあつたか、逆も忪へされぬぢやろう。

客人！魯祐は一杯いたゞとせう、これも御邊が首尾よう奏つてのけられたさの前祝ひぢや。)

かくは云ひながら、隠者は蘇國の伶人の暴飲に頭ふりつゝ、まめやかに盃ごり除けたり。

かゝるまに、騎士は音々をととのへ、短き前彈き終へて、ホルマン節を好みたまふか、はた南國節、ふらんす節、さては國詞の端唄になしたまうかをあるじにたづねぬ。

(はうた！はうた！ホルマンぶしやら、南國節やらは禁物ぢや、魯祐はこれでも英吉利の水で産湯をつかつた男ぢや、魯祐が本尊様ダンスタン大師もその通り、喃、騎士殿、さればこそ、蹄を削る人畜ぶるまひを見そなはずと一汎、他國の樂には尾脛をふつて居られましたわ。

このあなぐらで、唄ひもせう、聞きもせうものなら、英吉利種だぬのうたに限るのぢや)

「然らば、身共が聖地に留まりし際、昵近ちかづき申した、サクソンの琵琶法師が作る小唄の一曲、不肖ながら撥しらべを試み申さうと存する」

騎士はかくいらへぬ。

よしや、かの騎士は樂の道にかくるなき堪能のものならずとも、道にむかへる彼の趣味こころぞ、すぐれし師なる人々によりてつちかはれたりしところ疾うもたもはれにけれ。

うた聲ならで、滑らかと云はんよりは、うまれわて荒らかなりし聲音の斑々まだ和すべう、道は彼に啓示さだしぬ。つゝむれば、たのづとそなはれる足はぬふしく充さんに、道は、修めてぞ得らる一切を成しをへぬ。

かくればに、彼が彈奏は、隱者にすぐれて、うたき、わけん人によりては、いしくそこそたへられつらめ、まいて、律呂になげ入るゝ、今、颯爽の上の聲、今、哀烈の去の聲に、一揚一抑、うたへるうたに力をこめて、奏づるときに於けるをや。

十字軍士の歸國

武士の——はまれ買ひしいさなして

パレスチナーゆ還へり來し

戦士が肩の十字架の

色のあせしは裂れしは

いくさの爲なり風の爲

戦がたみを見せうなら

つかひ古るした盾のへの

撃たれ凹んだきづの跡

かくて暮れ六ツわきもこの

亭の下をば唄ひゆく。

「妹よ悦べ、遙々遠い

金の國から還つて來たる

そなたの殿御をよう見やしやんせ

みやげに賣はなかとまいよ

利き腕二ツ軍馬は一ツ

敵へふん込む拍車もござる

刺して殺すは投げ槍つるぎ

辛苦難苦にかり得た品は

あれやこれやら、そもテグラ一の

笑顔見たさの爲ちやがへ

妹よ悦べ、そなたのいとし

實ある殿御がうツたる砲は

捷つたいくさの祝ひのしるし

晴れな出立ちで行列通る

通りや逢ふが逢ふたら妹の

姿氣づかであかれうものが

うたふらた人ふれゆく傳令

傳令聲揚げ云ふやうにや——

「きつと目をとめこらんじ召され
向ふに居やるは

さても美し今小町姫

妹ぢやへ、く

清し目つきがありやこう勝つた
眼さすいくさのアスカロン。

まつた、笑顔で御覽じ召され
都に兜巾のズルタン討たうと

いかに鬼神が秘術をつくし

力しほるも甲斐なきさきよ

女房五十を寡婦にしたる

刀身磨いだは笑顔の砥石

さては、わん目にさまらで居やうか

雪の領足半を見せて

半かくした閃らいら閃らい

光澤のまばゆきちられた毛房

金の一筋捲かれぬながら

血まで流した異教徒それも

心一筋毛一筋」

妹よ悦べ、わが名は知れぬ、

いさをほまれはそなたのものよ、

サッサ抜け抜け妻戸の間

露はふるく夜は更けわたる

熱いシリアの風にもなれた

身には北風死ぬやうな寒さ

女心のはにかみとつて

手柄もて来た殿御ぢやものを

たていもうもそれ戀の意地。」

彈奏の間、隠者は今一流の樂劇評家のごと、しばく身をふるまひぬ。

彼は椅子に寄り、半眼をどさし、時に、双手を組み拇指を振りては、いたくも心はれて見わつ、
時に、ひろされる掌もて拍子を合せつ、機にて樂をぞあやなしける。

騎士が聲ねの、まめなる心になへるきはほご高う、節揚ぐるごと難う見わしをりくは、誰
も知る諧韻さしはさみつ、隠者は彈奏たすけたり。

かくて、うたも終ふれば、隠者は、唄のめでたかりし、いしくもかなでられしをたふへて、

(御邊は別としてもぢや、サクソン人は長い間、ノルマンと一緒に居つたのでナ、悲しい唄の調
子が、すっかりサクソンに移つて終ふたと魯齊は思ふて居る。

今のうたから思ひ出したのぢやが、實貞な騎士を國から逐ひ出したのは、何の仕業と思ひなさ
る？

歸へつて見れば、あろ一事があるまいとか、女房は男をこしらへて、イヤモ一悦に入つて痴態
騒ぎ、そればかりか、溝の戀猫が起水ささの唸り聲でもあるまいし、ソレ能う云ふ、そこの招

唄、留守はこの通の始末ぢや。

さはさりながら、騎士殿、魯祢は御邊の爲、堅氣な戀人共の成功の爲、祝盃をあげやう。

云ひ終りて、

(ハテ、御邊は忤のきかぬ方らしいやうちやナ)

と、添へしは、グイ呑みの幾杯に上氣せしかの騎士の、水瓶を銚子になぞらへしを隠者の認めたればなりけり。

「さらば、瓶なる水は、ダンスタン大師の御井戸より汲み取り給ひしとの御言葉にてはござらぬか」

(いかさま、尤ぢや。大師には幾百の異教徒をかゝの靈井にて、洗禮なされしとは聞き居れど、水をのませられたとは、魯祢のきかぬ事ぢや。

凡、世にある一切のものは、夫々使ひ道の繩ばりがゐる、オ、ソレ／＼、たゞけ法師の繩張りこそ、大師獨りと云はず、いかな者でも能う知つて居るワ。)

かく云ひつゝ、隠者は堅琴とりて。英吉利の古謠にふさへる、持ちまへの歌もて客人をふるまひぬ。

洗足法師

一年や
二年を

なれに許さん

ビザンツ

歐洲を

さりながら

切るゝこも

洗足の

なが騎士は

妹のため

馳け出でぬ

祈りごき

わが館に

急ぎわれ

何なれば

樂しみば

洗足の

西班牙かけて

草わけすとして

金のわらじの

見出でざらまし

法師にいたる

幸人

競馬すこて

かくて夕の

槍に貫れて

はこばれぬるま

騎士に告げなむ

妹の願へる

ほかにあらじな

法師のづけば

此世にて

王者とや

わがまし

一鉢と

袍直衣

わが兜巾

得んとしても

かづの王子は

三衣にかへん

さばれ鼠色の

代へて冠を

沙彌の身にして

あなれずき

れきごと思ふ
者やある

托鉢に

寺を出つ

往けばゆく地の

豊けきは

法師のために

しるきやな

身は雲水の

さだめなさ

心むかへば

さまよひつ

つかるゝときは

さゝまりぬ

知りたまはずや

三界に

なべての人の

住居こそ

洗足法師の

とまりなれ

晝なれば

迎へらる

すぐれし席も

梅粥も

たれか淨めん

わか來まで

こよなきかれひ

火のばたや

心づくしの

もてなしも

いなさは云はじ

洗足の

法師がもてる

格なれば

宵なれば

迎へらる

焼饅頭も

あたゝかに

人は酒饗の

口をぬき

黒の提子に

つきさしぬ

かくて女房は

わが夫の

泥にまみれん

辱しめを

れがひもしなむ

ふくよかな

枕一つを

洗足の

法師の間に

欠きもせば

長しへに

聖靴も案も

榮はあれや

天覽の呪なり

大袈裟も

頼みの品よ

法王の

身をそこなはず

荊にも

探りあつめんは

生の薔薇

洗足法師にぞ

世にひとり

ゆるさるゝ。

(此うたの外、原書にして半頁程、隠者と騎士との對話あれど、面白からざれば省きつ、請ふらくは諒せられよ。)

越の旅 (つゞき)

某

廿七日、今日の行程は困難であるとの宿屋の主人の言に随つて出發は七時、睡むたさに眼を摩りながら立ち出でた、今日は天氣晴良だとの彼の天氣豫報は數十年來の經驗に依るもので斯く聞いては何となく心も引きたつた、眼に映する一帶の風景、日本海の青海原は海岸に突出して居る連山の麓を洗つてゐる通路は其山腹に作られてゐるので、其處を通つて居る身には何とも云へぬ愉快さがある、何で斯んなに愉快に感ずるのか知らん、見渡す海の景色つて極めて單調ではないか、一面青々として居て遙かは水天彷彿青空に連つて居るといふばかり、白帆でも見らるゝと云ふならまたしも其さへ見ぬ、水鳥位は或は浮いて居たかも知れないが、そんな粟粒の様なものは目に入らぬ、勿論遙かに山角の突出して居るのが雲烟の間に見られぬでもない其れとて別に賞すべきでない、それならば山はどうかど云ふに何も趣味はない、四十度位な傾斜、大抵は岩石ばかりで木も森もない、處々に冬枯れの雜木が變な態度で立つて居るばかり。斯様に個々別々に考へて見ると面白みも何もない様だけれど凡てが合しては何となく愉快で飛び立つ様だ、であるからかの日夜嘲風に惱まれて居る木を見るにつけ、あゝ感心なものだ、自己の本性に従つて他からの攻撃も誘惑も何のそのと手を折られ耳を切られても嚴然として居ると思ふと、木自身が片手を折られて怨めしうに澁面をして居る様に思はれ可笑しくて思はず吹き出すと——連の友も何事かと

振向く

間もなく屏風の様に切られた岩の處に來た有名な親不知といふは此處ではないか知らんと迎いで見ると「如砥如矢」と刻まれてある、路は此處に於て一層高くなつて居る、灌木の間から海の青々たるのが見え、現在足下數十丈の處の岩礁には碎くる波が白く泡立つて居る、昔にはかゝる矢の如くではないが砥の如き新道は開かれて居なかつたので皆海岸即砂濱を旅行したのだらう、一斑に多少ながら海岸に沿つて砂濱はあるけれど此處親不知の處に至つては其れがない直接波は山麓を洗つて居る、それで斯様な名を得たのだらう、如何に昔の人が通行したのか聞きもせず又實際波打際を通行して來たのでなくて數十丈上から見ただから説明する事も出來んが兎も角困難であつたらうと云ふ事は確に目撃する事が出來た、所謂親不知子不知の名を得て居る場所はそんなに長くはない半里足らずと思ふ

これからの有様は矢張り一様で左方には海、右方には山と云ふばかりではあるけれどそれが面白い、これ迄とは多少變化が出來て來た、道路は山に沿つて居るのだから右に曲り左に轉じ或は上り或は下つてゐる、羊腸とか云ふのは斯様なものを云ふのではあるまいか、雜木林があり杉林があつて藁葺の一軒家もある、それから山から落ちる瀧も随分ある三段瀧とか名けられた瀧なんか立派である、道の深く谷間に入込んだ邊では全く海を見る事は出來ないで一時山間に入つた様だ、それにまた田さへ見受けられる驚くではないか、人間も随分色々な處に家を建てるものと思つた、主人は如何なる顔をして居るか見たかつたが生憎目に入らなかつた、詩的な容貌をして居るだらう

うと思つたが見たら却て失望したかも知れない

糸魚川で晝食をしようと云ふので勇を鼓して進んだ、残念ながら足が痛くて澁面を作つて進んで居る、初めの程は互に其苦痛を隠して一方で足が痛いかと問へば否と答へて瘦我慢をして居たらしい、之れも只負けたくないからで相手の方でも足が痛いと思へば何も隠す必要もない、苦笑しながら互の視線の一致した時は暗々に相互自白したのであつた、さて愈々到着して此家に入ろうか彼の家に入ろうかと左右に頭を振り向けながら徐々と歩を移した或は張子の虎の様であつたかも知れない、其中に大部は過ぎ去つて町は穢くなつた一方に此家によろいかと云へば他方で穢いといふ、他方で此家によろいかと云へば一方で不潔だといふ、どちらも斯くなりては威地張りとなつて、あわれ一軒も相當なのを見出さないので町外れに出て行きた双方空腹を感じて居るのに遂に斯様な境遇に陥つたのであるから腹も立つ、僕の説を容れないからこの通りだと互に他を怨むこうなつては見るもの聞くもの癪の種だ町外れの杉で作つた凱旋門が倒れかゝつて居るのを見れば何でそんなに毀れかゝつて居るのか馬鹿野郎と思ひ、松の木で鳥が鳴いて居るのを聞けば何だ畜生めと呪む、凱旋門や鳥も、いゝ迷惑だ、笑ひ語つて進んだ吾々も今無言で進んで居る、足の痛い上に空腹であるけれど歩調はどうして仲々速い、かくして一里半も行きた

此處は梶屋敷「君食はふ」といふので二人共宿屋に飛び込んだ、此四語は沈黙を破つた最初の語であつた、世の中では斯様な衝突から不和なんかを引き起すであらうと思ふ、腹膨れふば立腹なぞの分子の居處もなくなつたらしい、何處に飛び行きたやら、夏の夕立の様に一しきりの後は跡

方もなく消ね去つて居る、夕立の後には涼しさを感ずる如くに今は心の雲も消え失せて其れにも優る涼しさを覺えて居る

目的地の能生町にはこれから二里餘り喜久屋と云ふに泊つた

廿八日新築の二階座敷、用材は皆杉の白木、建具疊なども新しい、障子にはめられたガラスからは海を見る事が出来る、海は一帯に泥色を帯びて居る何故かと頭を傾ける迄もない近傍に流入する能生川が盛んに土砂を運び込むからである一斑に此地方の河川は水量が少い、其僻、雨などが降り續くと一時に水量を増して近傍の田野を荒すがた得意らしい、須く河にこんな得意を持つて貰ひたくないが仕方がない。波打際から十間と離れて居ぬから少し大きな波には洗ひ去られはしないかと思はれる程である、此二階で一日の休養をする事とした、朝早く漁舟であらう數十列をなして篷帆をあげて西に去つた外は何も見事出来なかつた、何の氣もなく見て居れば磯邊の鳥、貝を空中に啄へ上げては投げ落しゝて居る、山間の鳥には果して此知識が有るであらうか、生活状態知識程度など四圍から影響せられる事は今更ながら明かだ

波の音に和して耳に入るものは何？高く低く聞ゆる餅搗の音、その筈正月も二三日の間に逼つて居る、炬燵に横りながら之を聞いて居る吾、思は何時しか過去に溯つて居る、小供の時如何に此音の喜ばしかつたか、村の小百姓など寄り來つて男は搗く女はませる、空を搗かされて赤面する若者もあれば餅をいつしか臼から取り出して空搗させるのを得意とする女もある、やがて搗き終るとこれ迄は隅に扣へて居た先生も食ふ事には自己に及ぶ者があらうかと二本棒を取つて戦鬭準

備なぞと思ひ續くる内にいつしか熟睡したらしい、人のけわいに目覺めると下女が今しがた餅を持ち來つたのであつた

彼の高く低く碎くる波の音も心なく聞けばそれ迄だが、あまり窓際近くではあり冬の日本海の荒波だから煩いと思ふ心が出れば誠に堪え難くないでもない殊に夜に入りて四隣の寂莫なるにつれて一層耳につくに至つた讀書にも倦きて欠伸を催すに至つたから就床しようかと互に談して居ると主人がやつて來た、そこで「海岸もよいものだけど波の音は随分煩いものだね」と何心なく云つた處が主人は追從的の微笑を漏して居たがやがて「波の音聞きたくなさに山川に移ればまたも松風の音」とやつた、勿論吐嗟の間のすさびとは信せられぬけれど僕の方から云ふと慥かに充分まいらせられて居たのである、返し歌が幸にも思ひ浮ばんでもなかつたけれど待てしばし明朝出發の時書き遺して置かうと今は堪忍袋の中に隠して置いた、夜中幾度か波の音に夢を破られた事やら、隣室が明いて居たのだから其れの方に床を敷かせればよかりしにと後悔したけれど轉りし後の杖で何の役にも立たなかつた併し之れも旅行から得た一の經驗であるのは明かだ廿九日愉快で入り込んだ室を不愉快で見捨てる事となつたのである何事でもよく凡ての方面に亘りて研究して行くと意外な結果に到着するもので一見して表裏窮知し難いのは必ずしも人ばかりではない

幸に晴れて居るが吹き來る風の寒い事、一日休養したので兎も角足の痛みも去つたのであらうと自信して八時半頃出發する事となつた、道は相も變らず海岸に沿ふて居る海の濁れる事限りな

しで清く澄み渡り居ればこそ荒れ碎くる波の恐はあるが何となく其心底迄も讀み得る心地がして其大に比すれば九牛の一毛にだもしかぬ此身でありながら樂しく過ぎ行くのであるけれど、斯様に濁られて見ると嫌厭の情につれて恐怖も加はつて來る、清いのと濁つて居るのは吾々の心に及ぼす上にかほどの相異なる、然るに彼の濁れる場所に足を踏み入れんと明け暮れ熱望する男の人の心は解決に苦むものである濁れる處には蓮があるとは此等の人の口にする處だとか聞くが、口實も付れば付けられるものだ

晝近くもなれば腹も空いて來る空腹となれば晝食の豫想も初まらぬではない、斯様に濁れる海の魚は美味でないだろうと友が云ふ、兎も角もといふので有間川の比較的綺麗な家に立寄つた是より以前に名立で食へばよかつたけれど余り早過ぎたので止なく此處で食ふ事とした、此あたりの宿屋の腰を下す處は一斑に山字形か、さなくば凹字形を呈して居る、かくすれば多くの人を腰掛けさせる事の出來るは明かだが冬の寒い時には此凹處で火を焚いて呉れるのだ徒歩旅行者にはこれ丈で何より御馳走と云はねばならぬ、今し一人の赤毛布の疊先生飯を食つて居た傍には徳利の一二本もある、高聲で車夫と何か交渉して居たが自分の云ふ事のみで車夫の言は一向耳に入らぬらしかつた此高聲には吾々の耳の鼓膜も破れそうであつた、こんなのを傳染的疊と云ふのだとか、何故かと聞けば大聲で以て傍の人迄聾にするからだといふ、やがて膳も運ばれて箸を取りはしたが不味くて満足する事も出來ないので饅頭を買つて來さして腹を膨らした、舌鼓を打ちながら幾程を問ふ、うまくての舌鼓でなくて不平の舌鼓なんだ、二人にて廿五錢といふ、饅頭代も合計し

てかど問ふと猶豫なく然りと答へる、此處に至つては多少驚かざるを得ない、饅頭代十錢を去れば拾五錢、一人前が七錢五厘、天狗の税金たつた百万圓には驚かないが此七錢五厘には驚いた、魚の不味かつたのと海の濁れる故ではない事が解つた、あまり氣の毒であつたので更に十五錢を増し與へて驚きも遂には可笑しさとなつて早速飛び出した

直江津近傍の長濱あたりでは石油坑が處々に見受けられるので事務所らしい所に行きて見せて呉れないかと頼んだが近頃出ないと云ふ、たや／＼と出て行きたら傍で坑夫らしいものが道の下で少し出て居ると云ふから行きて見たら蒸氣力で大きな木製の車を廻して二三間の樫の棒を螺旋で連結しながら小坑に入れて居た傍に居つた髯の男に何をして居るのかと問ふて見たが一向要領を得ない、某の君の講義が不得要領だと云ふ人もあるがこんなのと比べると誠に贅澤な次第だと熟々思つた、馬鹿らしくて此處も亦出て行つた

直江津に着いたのは二時半頃、新瀉行の列車があれば乗込まうと先づ停車場に行きた、中は非常に暗くて人で溢れて居る、凱旋の軍人を迎へる人々で桶中の芋の子の様であるは無理からん事だが此暗いのはどうした事か、雪が吹き込むから到る處板で圍まれて居た爲とより外は了解する事が出来なかつた、目を摩りながら時間表を見れば生憎列車がないので、いがや支店といふに泊つた

三十日直江津發新瀉行の一番列車は盛んに烟を吐いて出發の合圖を待つて居る、發車の時刻は午前五時五十分であるから夜明け迄は間がある、雨が降つて居るので軒を打つ点滴の音は繁く驛夫

の持ちまわる瓦斯燈の光は微かである、荷物を積み込む喧しさを、橋を渡る下駄の音も止んだ頃、緩々とやつて來たのは外套を着た一對の學生、驛夫に急がされてわや左様かと急ぎ乗つた、之れは云はずと知れた吾々二人だ。瀉車は進行して居る吾々は寒さに齒の根も合ひ兼ねる、互に寄りそうて暖かそうに語つた居る一夫婦と、小供を抱きしめて居る若き女との外は皆一人ぼち、居睡をして居る老人も居れば、時々羨ましそうに彼の夫婦の方をながめる若い人も居る、商人体の男は袖手して時々笑ふのが微かにランプの光に見える何かよき利源でも見出したらしい、若い女は時々小供を接吻して何か囁いで居た、今夜は父様の處に歸るのだよと告げ知らして居たのである。冬の中葉であるから曉がたの寒さは殊に甚しい、身体を動かさないから暖を得る事も出来ずと云つて瀉車中で角力する譯にも行かず何か下らぬ議論にでも花を咲かせればせめて半分の寒さ丈けは忘れる事が出来ようと思はんでもなかつたが友は矢張り寒いと見えて外套を頭から被つて暗夜の石地藏様であつたので止めた、僕は多分軒下の乞食の様であつたかも知れぬ

兎も角夜は明けた車中の客も入りつ代りつする柏崎迄は瀉車は海岸に沿ふて進むのであるが海岸には岩山が裾を廣げて居るので墜道の多い事、明けつ暮れつ晝夜の交代随分盛なものだ、北陸線の敦賀以北の例の敦賀灣に沿ふて進むあたりの様だ、柏崎からは山地に入り込むから積雪の量は漸次増して來る満目皚々一層の寒さを覺ゆる、丁度柏崎で舞鶴海兵團の水兵が乗車して得々と海戰談をやつて居たので知らぬ中に長岡、三條、加茂等を過ぎて新瀉に着いた

三百四十間あるといふ萬代橋を渡り港の景色を見ながら市に入り込んだ北國一の港も憐れなも

の、大きな船として一艘も見えない、大坂の河蒸氣船の少し大きな位なのが、さうやかな谷川のみぎわに押し流された木の葉の様に岸に凝りついて居る、それも木の葉の様に其数が澤山あると云ふならばまだしも極めて小數である、川の中程には大きな砂洲もある、上流の方を見ると遙かに烟突など澤山見えて烟を吐いて居る様は廣々とした河との對稱もよく、下流を見て失望せられた新瀉も多少男振りを上げぬでもない、渡り終ると時節柄凱旋門も作られて居るし年も暮れであるから一層往來も繁きかは知らないが活動の有様も知られる

角屋とか云ふ宿屋に泊つて早速市中見物に出懸けた、神社佛閣の有名なものとか其他格別聞き及んで居るものもないので只市中を見る斗りの事である、白山公園、新瀉市民には之れ程の公園で充分であらう一の小庭園に過ぎない、これより却て市の脊面にある日和山にでも上つて見た方が氣がきいて居る、砂山で一部には松が生へて居る、遙かの波上に佐渡島が見ゆる筈なだけだが雨で見る事が出来なかつた、信濃川から水を引いて小河を作つて其河畔には柳を植て居る處は小坂の觀がある。又或一部では家の軒下を通過する様になつて居る誠に便利で之等は雪國の殊有でわろ。

北國美人とか云ふのは聞いた様に思つて居るけれども市中で美しい顔色の美人にも出會はなかつた或は家の内に隠れて居たかも知れない、鴨川の水で磨き上げて京美人は出来るかも知れないけれど信濃川の石油臭い水で北國美人の出来るとは信じ難い、出會はなかつたのは當然かも知れぬ、併し土地の人に聞けば或は其理由を説明したであらうも知らぬがそこ迄は行かなかつた

亭環の記

萍水

書と夜より快樂は行きぬ

たのしき春も夏も三冬も、

我がかすかなる胸は搖ぎて

愁ひもゆれど、あゝ、歡喜は

かへらじ——永久にかへらじ。(シエレー)

月は下弦の二十日なり、青木ひともと若葉茂きを稷々の風吹きて日は水に沈み懸て夜は水よりぞ初まりぬる、せめてものゆかしの鐘の音よ、此の世ならざる其の音に憧憬れて淋しの胸を語らばと途行く影は臙に落ちて長くひかれぬ、阮洋海神に接して歎きは海のもて來る春の潮に獨り阻まれし怨みの故ぞ、陽炎燃ゆる防婁に野草摘む子と袂別ちて此所に躡躑ふ己ればや、色の蒼きは愛を失ふ悲しの子とこそ知られぬれ、鐘の音は淋しの胸に答へぬ。

何よ、鐘の音聞かむのさすらへとや

眼を閉ちて想ふ昔、幻か現か、闇を掠めて白き平和の愛の影忽ち消えて黒きは罪の影押し來る、されば人の世夢の深き間に寂寞の天死滅の地を踏めばたゞこれ鐘の音と已が領なり、白き平和の

影吾れに永久に失せては赤肌利刀もて断たるゝ迄は影なき淋しき時尋ねて飛ぶ鳥の子、誠天地は萬物の旅舎、光陰は百代の过客なり、

鐘の音、神代より斧を入れざる森に響きて、寥廓に星渦きぬ。

○
She is still, she is cold

On the bridal couch,

One step to the white deathbed

And one to the bier,

And one to the charnel-and one, O where?

佐渡が島根に日蓮程の達識も息の音通ふ程こそ南無妙法蓮華經の聲絶えざりけれ、霜の朝日を待つ間なり、呪咀の聲と消え果てぬるぞ世の習ひとは云へ魂空しく現在界を脱して幽冥の境に逝きしあゝ我が母や、我が母や、まこと遇ふや柳因別るゝや梨果どこぞ知れ果てしなき想を空に漂はすれば、明眸清澄、朱唇生れながらに美しく、羅着けたる現の姿は吾が眼を遮りて、眞が夢か、夢ならば覺めよと叫べどいとほしき其の姿吾れに迫りなば齊居精進の籠り身にもかくて悲しきうちに僅はかりの樂しさあり、

その昔小さき膝押し折り抱かれて立たむの明日を今日頬笑まれ、やがて、見よあの耳なしの鳥を夕靄濃き里仟佰の間に投網もつ子に追はれても我が子可愛の一念に轉びつまるびつ鳴く様と或る

夕ひそかの物語未だ聲朗かに仰すれども、禍神が空なむる其の舌は天を焦す炎となりて美味忘れじと押し擴かれれば燈火揺く間もあらばこそ一字炎に包まれて吾が母の靈と肉とは離れたり、

初日はがらかに七彩の雲別けて瑞矢新潮を射れど世は晩秋その光女神の齊姫の頬に落ち來る時もあらむ、かくて去年は今年ならず、我れを信せよ死せしものも蘇生せむと聖者キリスト言ひたりとすれ祇園精舎の鐘の音はまこと無常の響にもれで、我が母の息は凝れり、梳づる烏羽玉のその黒髪は断たれたり、頬紅の色も失せたり織姫が手馴の柵機織るを見むためか觀念の眼永久に開かず、俗惡穢醜の世を捨てゝ白毫かすかの光を的に太古の境に行かむものと法の姿沈黙の靈に變じぬ、

旦に稽古の窓に凭れば垣を掠めて靡く霧は不斷の烟にして夕に鑽仰の嶺を攀づれば壁に漏れて照る月を常住の蝸とこそきけども吾が母は不斷常住に非ざるぞ假の世のいとうたけれ、抹香一陣の風に靡きて烟流るゝ如く色褪せたる我が頬を鏡に寄すれば涙跡滾々未だ乾かず

○
つめたき地は下にいね

つめたき天は上に照る

死もさながらの夜の氣は

落ち行く月の下にして

寒きひびきを放ちつゝ (シエレー)

三反の白幕柩を蔽うて鳳凰孔雀上に飛べば黄金涌く西佐渡が島根の和風も茲に慟哭の風と變じて
伽の燈を滅せむとす、昔我れを抱きし温き腕今早や冷うして我れに甘かりし優しの口は早や手力
のいかで開かむ由もなく冷たき肉冷たき柩に横はれり、生きて不斷の煩惱に死しては闇の奥津城
よなどてかく幸うすきそや、導師數珠繰りて引導の詞終れば悟の蓮苔に入りたるなり、聽て我が
愛の守りのその人は茶毘一片の煙となりて四天の聖者の許に舞ひぬ
嗚呼夢なれや此の現、小鳥も俱に母呼はむものをなごて我が身を涙に濡るゝ手枕に朱に染みたる
掌もて辛くも昔に微笑むのみぞ、

雨坤軸を襲うても鐘の響は變らざるなり龍頭永久に錆びざれば我が悲も永久なり、降誕りたる恒
河の岸の佛陀ありてより鐘の響きは森に渡りて、水に沈みて二十四番の風にのりてぞ今も尙人の
運命と闇の天地を司る也、野に山に這ふ餘韻哀れに我が胸の血潮に響けば刹那我が血は靜かに
動く、淋しの身を此所に運びて音に憧憬るゝも只賤の苧環昔を忍びて假りにも悲しのうちに樂ま
む爲めのみ。(六月四日稿完)

新 体 詩

六月五日

水 衣

この日十五夜

叢雲空を

みだれみだれて

東の方へ――

魔影なす

試験ぞせまる

いたむ小胸を

ゆん手に抱き

血を吐く思

歌筆しめば――

亂れたる

墨もそぶろに

君を祝ふと

あゝ何かとむ

狂せん胸に

文苑

ひゞきは高う――

ひとしきり

絃のきれ間や

「高鳴」こそは

この日のさだめ

占ひぬとは

歌はぬものを――

まぼろしよ

波の遠音は

波の遠音ぞ

いまよせ來る

まかれ行かむに

きづなは固う――

捨小舟

われをどいむる

四十九

君の手づから

たびし堇は

詩集の中に

ゑみたゝざらむ

いざさらば

どはの御わかれ

君を祝ふと

あゝ何書かむ

名知らぬ虫の

花 あやめ

紫の

うすき衣に

薫りもそひて身をまといふ

よしやまかれむ

なくねにひかれ

はつ夏の

森のさかえや

さだめと咽び

さかゆる森の

下ゆく水の

行方はいづく

十五夜を

雲は亂るゝ

斗 牛

心に彩の

影そむる 花あやめ

君や來し

形なく笛の一曲に

われやよびたる

そと舞ひ入りぬ

うす緑 夏の朝

かくしては

姿がへ數に

しほまぬ草の花あやめ

瞳清らに

それと高きす

にほろげの 姫の國

ゆらめきぬ

情七ツの

彩ある絃は琴たれて

見しはみ唇に

たもひの小指

緒にこそは いざゆはめ

たとふれば

海藻の袂

潮の音よき眞珠の

夢吸ふ光り。

さはたはむれか

縹なる 袖ふりぬ

今ぞきく

低きしらべ

君解き得しか妖なりや

一幻二幻

もだせば水に

眞なり 君の相

送大島師團長出征序

村上 函峯

明治三十七年二月。皇上發詔征俄。蓋責其背約也。越五月第九師團將發。先發一日珍休訪師團長大島君。君曰。孫子云。多算者勝。今我邦於俄得算多也。不戰而勝敗已判矣。我得五勝。彼有五敗。試爲子論之。我師有名。仗義興兵。扶弱制強。以懲無道。彼傲慢自大。恣虎狼欲蠶食滿洲。將及朝鮮。兵出無名。一也。我民上下一和。忠勇無比。加以精練。彼雖大國。民族混淆。烏合不一。概貪頑無耻之徒己。二也。我出兵於滿洲。海程數日可達。彼取數千里於一條鐵路。其費倍蓰三也。彼強占遼東。毒施殘害。民怨已深。我於清民有恩無怨。樂於歡迎。四也。彼所占據。如浦鹽。如樺太。皆分兵防禦。且內亂屢起。我則可專兵直攻。五也。是所以不戰而勝敗已判也。雖然巨砲撼地。烟塵蔽空。決機於兩陣。制敵於萬里。顧在將畧何如耳。孫子云。將者民之司命。國家安危之主也。吾輩豈可不勉乎哉。珍休聞而壯之。退爲序。且爲之歌。曰。

俄虜久欲吞韓清。吾皇赫怒茲治兵。東洋安危在此舉。何人不起敵愾情。憶起甲子征清役。王師一擊震霹靂。滿洲父老仰威德。遼東山河歸版籍。當時俄虜忽來妨。藉名平和逞非望。將軍忠勇少儔匹。懸軍復入舊戰場。砲聲動天亦烈。金城鐵壁悉蕩滅。期君他日奏凱還。定向燕然勒功烈。

和歌

夕がほ

斗牛

ほととぎすなきぬ更けてはさだすぎしひと寝ねられぬ後夜の雨哉
紹友禪袖にかくれて透さかげに松の月みる三尺のひと
落日や瓊のやうにも島二ツするてながめぬ錦欄の海
四條五條橋の上なる天の川下は京の夕涼みかな
寶玉の小櫛や籠や闌ながら螢をめづるひとのよそほひ
夕粧ひ卯の花かをる廻廊に燭して見よと文まゐらせぬ
椽にはべる浴衣のひとの裙落ちし扇のうへの夕顔の花
うすものやひとり蘭の襖をとる湖上は月の初夏の風
雲に駕しこや來迎のつかひかと蚊やりの煙の君見まつりぬ
音無川藤むらさきに浮草の白きがうへの有明の月
あくるまや亂れしのぶの繪帷子すそはたじな想ひ短か夜

花 筐

告 天 子

粗朶垣の海人が小庭は蟬白し朧月夜の濱九村

海越ねて島に珊瑚を探らむと舟して行くよ潮薫る宵
鼓抱いて振りの袂の小走りや櫻並木に月朧なり
鐘にくれて月ねばろなる大悲閣花分衣京へとくだる
笈に胡蝶もつるよ春風や垣に蛇なく紀伊は熊野路
春風に舞の小袖をなぶらせてとどろと鳴らす舟板の音
寄居虫の出でよ髭とぐ春の夜を何處の海人や戀になくらん
ふと沈む魚に花藻の影ゆれて鐘渡りくる夕ぐれの池
燭とりて春の殿堂覗へば坐禪の菩薩箔疎なり
金泥の壁畫まばゆき殿堂や畫ける虎に生氣滿ちたり
空を抜く山七合の岩窟や靈ある雲の渦と湧きたつ(富士山)
百鳥のあけを讀ふる譜によせて綠野の道笛吹きてゆく
ふり仰ぐ御空に高き朝虹の彩の七色うるはしきかも

曙會詠草

天人が龍車をかるか野をこめて百丈程に陽炎もえぬ
藻かり舟かひさすうたに七浦の風もしづまる少女が春よ

嵐

月

相見てはうなだれがちの櫻人泣きに來よとてふみせぬものを
今日のみの春ぞと云はれしめやかに花踏みゆきぬさすらへ人は
麗人のあし傷つけんたはぶれと春がうみたるつくくしかな

み

ご

り

み祭りにねりくる山の法師らが腰に佩いたる太刀の長さや
けふ三日ひくな遊びの姫様を見しよねびたるたんあるじども
逝く春や戀しと見しか夜をこめてそごろ心の芭蕉旅だつ
春雨の音なくふるに野の小田の蛭もなかば聲きこえなむ
ちさき女子のぬひあぐみたる雛衣手にして睡る日永き春や

秋

羽

宵や朧隅田十里は花にして月にすさびの笛ぞ節よき
花吹雪上臈通ふ長廊を落し文あり春のねばろ夜
嵯峨や小室京は櫻の眞盛りよ朝大路を牛車ゆく
吹雪してうたげ半を舞姫の御袖に迷ふ花びらのよき
春雨は細うしぐるる京の町紅うる家の軒ならびたる

琴

川

宵はて、公達退出づる南殿や月は朧に櫻花散りくる

ロイカヂヤ霞こめたる小波に戀の女神の幻に見ゆ
渡船待つ間の朝よ君とわれ李下に談りし去年のこの日よ
悲しみや煩悶の友よ犀川よ今はわかれん永久に清けれ
董さく畔道つたひ乙女らが芹つむ手元陽炎のぼる

天

南

われひとり流れに音なき澱江や月姫渡る櫻宮の堤
白百合にやどれる露を君も見よあけなば消む星姫のかげ
かたらはゞ夕逍遙の野の道や二ツの影に月を知るまで
欄干は瑠璃のうてなか珊瑚か花より生れし春の夜の月
立琴の調へにさめし春曙や天使の御裾花がすみして

秋

水

ゆく春の鐘きゆる頃志賀の浦ゆそと花筏波の宮へと
さゝがにのつらしとつゝむ枯れし葉を野の火襲へるつひの定めか
すくひ呼ぶ亡者かあけの金色にかしらもたぐる沖津白波
性よわき人さまとひぬ運命の何すと更に怖れはせねど
罪したまへ二人逐ひたるゆめ見ぬと云ふをさくても只ある人を

紫

清

うらゝけき海の面より立つ塩けぶり鯛むれ來ぬ鳥のあせりよ
濱にたてば金色のあや織りなせる西の空美しう潮緑なり
漁火も消れてたぐらきはまあゆみ愛星あかく新潮よする
稚兒三とせ白きリボンのぬかづける招魂祭にさくら散るとき
利鎌かけ斧とる腕折れむまで奮ひたゝかへ熊ほゆる邊に

斗

牛

貝散らふ珊瑚の花の春海に紅衣の鯛の二ツを思ふ
振り袖を金糸の蝶の抜け出でゝ舞ふとも見たる八重櫻花
髪黒き潮のなかに光りする眞珠のかざし春風吹きぬ
與謝の海を渡りも終へでゆき迷ふ女松男松の天の橋立
手を水にひたす子もあり兩國を簾してゆく家形船かな

水

衣

廻廊をどいろふむなる近衛らの鎧みだるゝ春の夜の月
濱なれば貝こそふさへ汀には浪にのこれるあはれと云ひぬ
靄の奥に入る君逐ふと眼さめてはわかれの今ぞ窓の日の憂き
小琴ひき今君なかば虹の環をわたるとぞぐろ空あふぎぬる
松風を二人してさく春の山はわれらの國と霞こめたる

俳句

文苑

蓮の浮葉

四高俳句會

五十八

紫

影

短夜や蓮の浮葉の卷残る
蝙蝠や寄席の札場の灯を点す
大 幟 小 幟 阪東八平氏
衣を振ふ千仞の丘や青嵐
日傘うつはらゝ雨や杜若
尿して向き直りけり雨蛙

紅

芙

蓉

ほのぼのと顔に明け行く矢數哉
草に入る有明月や青嵐
短夜の明けて淡路の山近し

白

水

時鳥湖畔の村の明け易き
砂流す池の水口や杜若

秋

雨

参籠の水の清瀧明け易き
鎌倉や野鍛冶が門の杜花

嵐

月

竹を切る翁の簑や雨蛙
幕濡らす若葉の露や大矢數

紫

雲

大津繪をひさぐ小家や夏柳
比叡の雲湖にかゝりて青嵐
杜若紙燭して女橋を行く
猫塚に下草茂し雨蛙
紫に暮れ行く京や染幟

牡丹十句

白

水

朝霧や簾しめつて白牡丹
床置の獅子の古びや白牡丹
大臣の似非風流や富貴草

文苑

五十九

牡丹やき砂しめる小糠雨
夕月や牡丹くづる弘徽殿
星あかり白き牡丹の大さよ
寫生する牡丹崩れて仕舞鳧
抱一の繪皿洗ふや紅牡丹
明け易き夜を崩れ鳧廿日草
實となりて葉のみ淋しき牡丹哉

紫雲兄の卒業を祝して

龍となる白蛇の衣の名残かな
薰風や秀才を送る寮の人

ゆく春

福壽草二寸ばかりを命にて
から籤に女すねたる寶引
豆撒や一粒あたる足の裏

告落告
天 天
子 英子

夜芝居の客留札や月たほろ
春風や大官通る北京街
雁風呂に念佛申す男かな
ただやかに踏繪はてたる小村哉
橐駝師の根岸の里や菊若葉
花散るや悪七兵衛の足の痕
着道樂食道樂の花見かな
桑を切る音も更けたり蠶飼ひ
鮎鮎の風味を愛す山葵哉

(清水寺)

落 英

元朝や參賀の武臣揚として
雛二對妻も娘もすこやかに
白酒や梨地の膳に花の影
輪講の學徒つとふや春の宵
春雨や隣から來る歌使
陽炎や野は一色の淺みどり
行春を主なき琴に惜みけり

辻斬の風評に更けて月たぼろ
壺焼の沸々として月たぼろ
大江戸の花にわけゆくぞめき哉

四高俳句會吟草

蛇渡つて細波に揺ぐ蓴かな
麻刈つて麻を褥に晝寝かな
いさゝかの螢の數や籠の草
新妻の鎌の捌きや麻を刈る
水村のそばふる雨や夜振の灯
佛性の母にかくれて夜振哉
背戸口や宵夕顔の花あかり
酒好きの僧正まゐる蓴かな
繪團扇の風に消はたる螢哉
麻刈つて涼しき露に濡れに鳧
蓮飯に嬉しき蓴の三杯酢
蛭泳ぐ蓴の池や栗の花

嵐

月

萍秋紅

芙

雨水蓉

白

水

雨の宮階ぬれて螢飛ぶ
露にぬれて竹より竹に螢哉
夕顔に灯す寺の長屋哉
麻刈るや峰より峰へ早雲
川狩の獲物を別つ柳かな
沼の泥あけて蓴に水乏し
門の月あした刈らるゝ麻畑
網に入る蛙を憎む夜振哉
水に落ちて螢流れぬ一二尺
夕顔の門や人まつ咳ばらひ
東雲や夜振の川の捨かどり

紫

雲

紫

影

蚤五句集

蚤に寐ぬ隣もありて高笑ひ
背戸に出て蚤の衣を振ひけり
蚤取粉買うて来る夜や蒸暑き
菊川の西に宿れば蚤多き

紫

雲

萍秋

雨水

達磨抱いて猿とる眞似や猿の智慧
 床ふめば蚤はひ上る空夜哉
 疊更へて蚤なき宵の樂寐哉
 曉を蚤の落ち行く蒲團哉
 寐ねて讀む小説本や蚤の飛ぶ
 指に唾すはと蚤取眼かな
 捻ねられて蚤の地獄や煙草盆
 手探りに蚤とり當てし嬉しさよ
 蚤の跡稚兒の肌をいどほしむ

◎紫雲子を送る◎

青嵐帽子飛ばさず行き給へ
 夏瘦に鰻を喰うて肥え給へ
 君は今山北あたり鮎の酢
 筍の竹となる日を祝しけり
 麥秋をわづらひ給ふ事勿れ
 此の藪の墓も見送り申すべし

嵐 白 月
 水

紅 芙 蓉

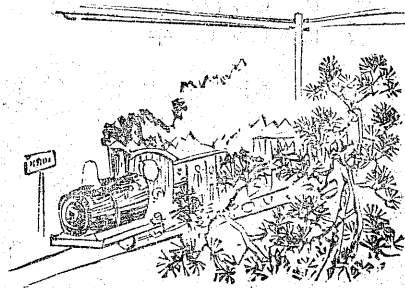
紫 影

紫 影

紅 芙 蓉

紫 雲

金城を辭す
 たのめてそ行くなる關の橋や



雜報

時習寮の過去現在未來

(河合生)

人事變轉多し、時習寮の過去はいかに。
超然塵外に聳立して俗流を白眼に附し、此に平和の仙境あり、此に二百の麒麟兒存すと叫びしは是昔日の時習寮なりき。三寮の健兒意氣將に天を吞まむとし、猶額大の小天地向古羅馬の面影存すと誇りしは是昔日の時習寮なりき。龍首高く北辰を指し、濁波を蹴立て濁流に掉ししは是昔日の時習寮なりき。活動の血に燃え、希望の光に憧れ、傲然天空を闊歩せしは是昔日の時習寮なりき。あゝ花の如く美しかりし時習寮、牡獅子の如く勇しかりし時習寮、其昔日の面影を吾人の幻覺にのみ止めて、何れの果へ旅立ち

しか。追へども其影を認むる能はず、尋ねれども其聲を聞く能はず、古樫の下靜に過去を回想すれば池邊の畜牛モート其聲淋しく、夕鴉悠々翼を收めて南す。

人事變轉多し、時習寮の現状は如何に。

南寮の屋棟一たびイルミネーションを以て飾られし以來、在寮生僅々參拾余名。あゝ情なきは時習寮の現状也、痛嘆すべきは時習寮の現状也。春の海原の如く雄々しかりし時習寮、母の懷とばかり温なりし時習寮、吾人をして甘く樂しく陶然として酔はしめし時習寮も、赤龍一たび紅蓮の舌を逞しうするに至りてや、在寮生僅々參拾余名。あゝ眞に痛嘆に堪へざるは時習寮の現状ならずや。吾人は人員の多少を以て直ちに時習寮判斷の對象となさずと雖も、只其あまりに消極的なるを憤る者也、内氣的なるを喜ばざる者也。現今の時習寮は有つて無きが如し。只

々頓狂なる鐘聲、比較的廉き牛乳、廊下をうろつく小使位によりて其の存在を聯想するに過ぎず、あゝ時習寮何の面目あつて吾人に對せむとするか。

翻つて金澤市を觀察せよ、風俗は淫靡也、氣候は不順にして雨のみ多し、地勢は平凡にして山なく海なし。實に青年の客氣を消耗し、豆腐の如く軟化せしむるには殆んど理想的の地なりと云ふべし。記せよ金澤は世にも恐るべき軟化谷也、豆腐谷也、腐敗谷也、此の間に浮遊する六百の青春あゝ亦危い哉。只此に不可侵の地あり、名づけて時習寮と云ふ。廻らすに石垣を以てし、その上に障らば刺さむと身構へる枳殼の様眞に意到れりと云ふべし。豆腐谷を目懸けて歳々蟻集する二百の學生は、未だ其生温き外氣に觸れざるに先ち、先づ此の不可侵地に笈を下すを常とす。一たび入つて時習寮を味はむか人は先づ

董然として其の甘味に酔はすんばあらず、酔つて而して後其涼氣に醒めすんばあらず、醒めて再び其甘味涼味を咀嚼せすんばあらず。其の滞在時日は僅々一年なるも人は凡て鉄腸石心となりて平然怖るべき腐敗谷をも豆腐谷をも闊歩するを得るに至る也。かくの如くすること十余年、我々校風の嚴然として動かすべからざる者あるは實に此の一不可侵地に起因せすんばあらざる也。

人事變轉多し、時習寮の將來やいかに。

前述の如く時習寮は實に校風の依りて出づる關門也。關門にして小ならむか校風又小なるべし、關門にして赤からむか校風又赤かるべし。而も今や時習寮は悉んど存在せすと云ふも可也、然らば吾校校風も又一層の衰頹を免れざるべし。由來吾校風は左程立派なる者にあらず、水が冷たくなれば氷になるばかりなり、吾校風も亦氷

たくなれば氷になるばかりなり、吾校風も亦氷

と化せざるを得ず。あゝ將來、幾多の燃ゆるが如き望を抱いて吾校に集まらむとする健兒は凡て是れ凍死の運命に遭遇せざるべからざるか。之れ校を愛する者校を憂ふる者の一日も忽にすべからざる所也。

時習寮將來の方針として當路者に望むは

一、南寮建築を急ぐにあり、此は吾人の此に喋々するを要せざる所なりと雖も、只切望に堪へざるは南寮建築と同時に多年北辰會の問題となりし無聲堂と、時習寮との連結廊下のことなりとす。尙武の必要は論するの要なしと雖も此の廊下の爲めに時習寮一般に及ぼす結果は豫想外なるものあるべきは吾人の疑はざる所也

二、現今の二年生即ち九月よりの三年生より舊寮生を入寮せしむる事なりとす、現在の二年生は恐らく時習寮の黄金時代に遭遇せし者なるを以て此等を入寮せしめて今や全々破壊し終られ

たる寮風を振起するは目下の急務とする所なるべし。

三、寮務係の人撰を必要とす、佐野先生去つて以來時習寮敢て振はずとは吾人の屢々耳にする所なり、苟くも幾多青春の士を監督し訓導して敢て過なからしめざるのみならず、引いては其の人格をも改善せむとするには少くとも献身的教育家たらざるべからず、熱情の人たらざるべからず、有徳の人たらざるべからず、而も世にはかゝる資格を備へたる人は到る處に落ちて居るものにあらす。此れ人撰を必要とする所以なりとす

要するに現今の時習寮は沈滞の時習寮也、萎微の時習寮也、花のみ果てく色をも香をも失へる時代也。勿論火災は其直接原因なるべしと雖も、火災に遡巡して爲すなきが如きは吾人の取らざる所、男子の熱誠は須く天災以上の者たらざる

べからず。聊感を叙して在寮生及び當路者の反省を促す

北辰會各部管見

(河合生)

柔道部。昨冬より今春へかけて柔道部は未曾有の盛況を呈せり、小泉中村久田の三初段を初め、長屋、倉内、正力等の猛將勇士雲の如くに起り、其の客氣の進る所は南下策となりて現はれ、第三高校への挑戦状となりしも、不幸敵の應ぜざりし爲め空しく腕を扼して時機の到來を待つに至れり。然るに時習寮一たび、災厄を蒙るや、無聲堂は忽にして其の根據を失ひ、柔道部亦爲めに影響する所となり、今や日々僅々十數名の稽古者を見るのみ。而も火災以來何等之が前後策を講ずるなく、其の成行に放任して敢て斯道の振興を唱へざるが如きは亦柔道部委員の責に

歸せざるを得ず。明春は是非南下策を實行せざるべからず、若し京都にして應ぜざる時は岡山熊本の二校と京都に會して雌雄を決するも可也。何れにしても斯道熱心諸君及び委員諸君の猛省を促す、

傳へて曰、青木先生、七月を以て當地を去らるべしと、果して然るか、吾人未だ之を知るを得ずと雖も、若し果して然らむには吾柔道部の爲めに非常なる大痛撃と云ふべし。先生の達道を以て先生の熱心を以て吾人を導き給ひし以來、吾柔道部は始めて此に大々の發展をなすを得しなり。先生を除いて先生の如き先生を得べからず、此れ吾人の敢て大痛撃と稱する所以也、若し先生果して去られむか、無聲堂裡幾多の健兒は先生の徳を受け先生の術を習ひ、日々胆々として修養怠らざる者あるを想起し給ふべし。若し先生果して去られむか、あの鳶生ふ古松の蔭、

緑萌ゆる古櫨の下、先生の御加餐御壯健を切祈する六百健兒のあるを想起し給ふべし、若し果して先生去られむか、日々先生の膝下筋骨を練り徳性を養ひし、幾多活動の兒の數十年の後、いかに天下に雄飛しつゝあるやを期待し給ふべし。

劍道部、石川先生、たび去つて以來、吾劍道部は藻脱の殻の如くになり、あゝ嘆すべき哉。劍士諸君、諸君は石川先生の爲めに劍を學びしか。否、諸君は必ずや諸君の筋骨と膽力とを練る爲めに劍を學びし者なるべし。然らば何を苦んで三尺の太刀を提げ、無聲堂裡に活劇を演ぜざる。尙武の氣象と學生の氣風とは、溫度と寒暖計の如し、一高一下、凡て其の行動を共にす、故に其校の武道の盛衰は以て其校生徒の氣風を律するに足る。あゝ、我校の氣風は然らば不振なりと云はざるを得ざるか。若し果して然らば吾人は口

を噤せむ。然れども諸君にして潜勢力を有しつゝ敢て奮激せざるが如きあらば之れ吾人の甚だ取らざる所なり。

庭球部、柔道部と同様近來になき盛況を呈せり、昨九月新入學生を迎へて以來、頗る其の面目を一新せり、即ち渡邊、今田、色部、矢崎、前田、江守の諸君或はサーブを以て、或は前郷を以て、或は強球を以て、各々其の武器を寸余の球に込めて我北辰校のコートに出陣するや、活氣立ちに生じ未曾有の進歩を見るに至りしなり。然れども吾人の甚だ庭球部の爲めに遺憾とするは、爾來吾部の根莖を以て任せし千代、東郷、小澤、藤田、横田、村松諸君の卒業にあり、吾人は九月又新に新進の猛士を迎ふるを得むも、果して此等諸君の後任たるを得るや否やは疑なき能はず。特に現今の二年生は庭球界に於て全々無價値なるを以て吾人の杞憂は益々大ならざるを得

ず。囑望すべきは現今の一年生諸君あるのみ、諸君希は猛省一番、我校庭球部の名聲を發揮するあらば幸甚也。

野球部、野球部は復活の氣運に向へり。吾人喜はざるを得ず。野球は實に男子的運動にして其の勇壯にして熱烈なる点に於て遙に他の運動を超越する者なり。然るに金澤は雨多きの故を以て野球は全々度外視せられ北辰會議上に於て野球全廢論すら出でしこと再三に及びぬ。然るに幸にも今年五月高岡中學校よりの挑戦に會ひしより復活の氣運に向ひしは甚だ慶賀すべき現象なりとす。高岡中學校との仕合は好成績を以て吾部の勝利となるを得たるも高が中學との仕合なり、毫も以て誇となすべからず、況んや高岡中學校の野球界の現狀は近來になき沈滞の狀態にあるものなれば、二三年を出でずして捲土の意氣を以て押寄せ來るは火を見るよりも明なり

とす。弄球の士須く猛省して可なり。中學位を相手にして満足するは斷じて不可、少くとも東都にまで乗り出で、中原逕鹿的の元氣あつて欲しき者なり。現今吾校野球部の中心は二年にある者の如し、就中、栗田は殆んど獨歩の姿也、されば本年七月卒業生の爲めに野球部に衰頽を來す理由殆んどなかるべし、委員諸君希くは此の機運を利用して斯道の發達を計れ、機は去り易し、奔馬の如し、遂に追ふべからず。

弓術部、蹴球部云ふに足らず。

語學部、一學期間に一回の語學會とはあまりに情けなし、少くとも二三回は開きて貰ひたきものなり、出演者は多々あるべし、特に聴衆の常に多きは語學部の誇となす所にあらずや。然らば二回開くべきに必要とする要素は只委員の盡力あるのみ、若し氣運の向ふ所に乗せずして尙ほ從來の習慣を墨守して因循なすなきが如きこ

とあらば之れを全々委員の無責任に歸せざるべからず。尙ほ該部に對して吾人の切望するは語學大會の折のドラマを平易になすにあり。ワーレンスタインとかハムレットなどの如き一頁を讀むに一時間も要する書物の暗誦をやつて貰つては外人ならぬ日本人には少々閉口なり。若し夫各自の利害のみの爲めに出演するならむには吾人は些少の不平をも陳せざるべし。然れども幾多の聴衆を集めて此れを公開する以上は少くとも聴衆なる者を眼中に置かざるべからず。

吾人は自信す、少くとも當金澤に於ては吾人は北辰會の語學大會に出席すべき語學の力量を有する者の一人なる也。而も結果は之に反せり、吾人は多くのドラマを了解すること能はざりき。吾人のみにあらず、吾人の友然り、吾人の同級生然り、恐らく完全に了解し得し人は十分の一を以て數ふべきや否や。之恐らく語學部の一

趣意とする所にあらざるべし、諸君以て如何と

なす。

講話部。講話部の事業として特筆大書すべきは本年五月至誠堂にて催せし村上專精師の講演なりとす。師は懇々として修養の法を説き誘惑の恐るべきを論じ、六百の聴衆をして慚愧面を舉ぐるの勇なからしめたり。師の論せられし所は極めて平凡にして實踐的方面のみなりしかども、其の中動かすべからざる哲理の貫徹せるありて、吾人の心裏状態が師の口を藉りて言となりては現るゝが如くに感ぜられき。

演説部。北辰會各部の中に最も隆盛に趣くべき性質を有しつゝ、最も不活潑の状態にある者を演説部とす。青年は客氣に富む者也、意見を抱懷する者なり、豈議論なからむや、豈所説なからむや。然るに不幸吾北辰會には演説部てふ名のみ存して實なきを如何にせむ。吾人は何れの

地に於て吾人の所論を吐露するを得むや。吾人はいかにして他日國家國民を動憾せしむべき雄辯の練習をなすを得べきや。若し吾人にして國なからむか吾人の不便夫幾何ぞ、北辰會に演説部のありてなきは尙吾人に國なきが如し、一日も堪ゆべからざる也。何故にかゝる不振を來せしや。會員の不熱心も勿論其の一部原因をなすべしと雖も委員部長等の不熱心は其の大々的原因たらざるべからず。一學期一回の演說會などは兒戲に類す、少くとも月一回多くば毎土曜日にやつて可也、況んや物理教室の如き貓額大の室にて、聴衆二十人を集め得たる演說會には驚嘆の外なし。青年は氣焔を吐かざるべからず、氣焔を吐かざる青年は氣焔を吐き能はざる青年也。かゝる青年は世に用なき長物也、談するに足らず。

現今の演說部の委員は幸にして凡て三年生のみ

なり、此の七月には何れ卒業すべきを以て演説部の爲めに稍々喜ぶべし。新に委員に推薦せられむ諸君は前徹を踏むことなく、勇猛邁進、自己の意思に従ふて演說部の振興を計りて欲しき者也。

遠足部。毎回の遠足者三四十名に過ぎず、而も毎回同じき人々のみなり。然れども北辰會遠足部の遠足の様な面白き旅行は他に亦求むるを得ず、故に吾人は人の少きを憂とせず。只幾多の會員が未だ遠足部の旅行なるものを味はざるの愚を憐むのみ。

雜誌部。九月新來の一年生を迎へて以來、毎回投稿集まること山の如し、第二二學期には各々五十六枚を沒書となすの止むなきに至れり。但し第三學期は學年試験の影響ならむか其の投稿比較的少かりき。雜誌部委員の不熱心極まるは委員自身の自白する所也。然れども委員の不熱

心に、關らず、投稿の集まること、多きは、若し委員の熱心ならむ折のいかに雑誌部の大飛躍の時期なるかを豫知するに足らむ。

行軍記事

(河合生)

「吾に汝の國の青年を見せしめよ、然らば汝の國の將來を知るを得む」と、是古羅馬以來不朽の名言也、實に青年は國家の根莖なり、故に青年にして活力なからむか其國は既に根原に於て腐蝕せる者其枝葉花實の枯死せざらむと欲するも豈得べけむや。吾現代青年の趨向を見るに沈

滯萎靡實に三嘆に堪えざる者あり、其特徴は輕薄にあらずば偏狹也、高慢にあらずば不眞面目也、勇健質朴若しくは克己寛量等の美德は藥にする程もなき也。然り吾國は辛うじて露國に勝つを得たり、然れどもこれ生意氣にして意氣地

なき現今の青年の力にあらずして維新當時に於ける破衣破帽的青年の客氣の溢出せし結果に過ぎざる也。
吾校裏半千の健兒は幸に此の潮流に反抗せる者、實に吾人をして喜悅安堵せしむるを得と雖も、見ずや彼の虚空に屹立せる岩石も、風吹き雨降らば何んぞ土と化し泥と流れざらむや。鉄心の健兒時ありて俗流に棹し、天賦の美しき毛髮にコスメチックの惡臭を残さむとするは吾人の甚だ遺憾とする所也。

此の意味に於て吾人は沈滯を嫌ふもの也、不活潑を惡む者也。人間は動かざるべからず、働かざるべからず、雪中行軍可也、競漕競走可也、柔劍術可也、野庭球可也、人間は勉強ばかりして居れる者にあらず、若し勉強ばかりして居る人あらばそは眞實の勉強にあらず、うその勉強也、「流水に子子生せず」、「小人閑居して不善を

爲す」、能くも穿ちたる者かな。

果然喜ぶべき掲示は現れたり、片山津地方に發火演習を行ふと、吾人の血潮豈燃わざるを得むや、不活潑を好む軟骨兒は火鉢の側烟草に吸はるゝも可也、下宿の二階小説に讀まるゝも可也、石川屋の食堂菓子に食はるゝも可也。然れども識者は喜べり、當日校庭に雨を犯して集まれる五百の健兒を見て微笑めり、而して叫べり、北辰校裏向上の旗幟尙鮮なりと。あゝ尺方の掲示亦千金の價ある哉。

期に立つ二日、首霜の綠、色濃き運動場を踏みにおつて大隊演習を行ふ、殘花既に地に委してより旬日、翠柳正に青々、辰旗翻々、劍影閃々、吾人をして魂遠く飛んで片山津湖上砲烟水を蔽ふの幻覺を起さしむ。あゝ誰れか快ならずとせむや。當日の部署次の如し。

統監部

統監代理	今井省三
統監部員	中野嘉作
同	三竹欽五郎
同	本間好茂
同書記	山田喜久良
同	市村塘
同	宮川熊三郎
同	小田切良太郎
同	宮地彦八郎
同	河合義文
同	上原菊之助
同	久保田圭右
同	山岸勘太郎
同	河野義一郎
同	西英盛
同	林並木
同	永井靜雄

衛生部員

村田金太郎

同

三木三郎

同

岩井武雄

第一中隊附視察員

高橋郁治

同

藤井乙男

同

茨木清次郎

第二中隊附視察員

西田幾太郎

同

田部隆治

同

田中鉄吉

第三中隊附視察員

八波則吉

同

村本維夫

同

水芹幾次郎

同

高橋周而

大隊本部

大隊長

磯田正謙

大隊副官

笹井幸一郎

大隊旗手

密田良太郎

大隊書記

岩田幸美

大隊書記

河合良成

衛兵長

中村正

第一中隊編成表

第一中隊長

吉崎佐次郎

第一小隊長

高倉德太郎

第一分隊長

大橋八郎

第二分隊長

白上祐吉

第三分隊長

板谷吉次郎

第四分隊長

武井羽次郎

第二小隊長

衣斐清香

第一分隊長

中田昌三

第二分隊長

石坂大麿

第三分隊長

熊谷亮照

第四分隊長

中山千穎

第三小隊長

小澤民治

第一分隊長

大場品

第二分隊長

下田光造

第三分隊長

湧井廉平

第四分隊長

千代嘉一

特務曹長

今井節

曹長

門脇願珠

給養

脇田武夫

第二中隊編成表

第二中隊長

戸部良祐

第一小隊長

中山隆吉

第一分隊長

眞館保

第二分隊長

大谷確藏

第三分隊長

安江安吉

第四分隊長

美馬正二

第二小隊長

森岡二郎

第一分隊長

正力松太郎

第二分隊長

三邊長治

第三分隊長

八田與一

第四分隊長

瀧谷壽彦

第三小隊長

島田貞信

第一分隊長

塚本貞禎

第二分隊長

船津領二

第三分隊長

江原眞侶

第四分隊長

森内政一

特務曹長

品川主計

曹長

牛村喜勇

給養掛

青木精一

第三中隊編成表

第三中隊長

小谷仁十郎

第一小隊長

新井堯爾

第一分隊長

檜田太市郎

第二分隊長

小畑友正

第三分隊長

齊藤彌平

第四分隊長

佐藤謙之助

第二小隊長

原康次郎

第一分隊長

小林愛次郎

第二分隊長

藤崎小三郎

第三分隊長

清田治郎

第四分隊長

西山新

第三小隊長

宮田格

第一分隊長

小嶋政一

第二分隊長

岩澤潔

第三分隊長

牧野喜太郎

第四分隊長

泰勝輔

特務曹長

上坂 巖

曹長

渡邊 一布

給養掛

青木富太郎

▲ 出 發 ▼

豫行演習の翌日以来一天雲かき亂れ、日蝕んで風寒く滿校の健兒聊愁色なきにあらず。果然五月三日は夜來の細雨肅々たる中に來れり。爾來

遇せしは甚だ遺憾とする所也、而も火勢頗る烈しき者あるを以て本大隊は一時出發を見合す、鎮火次第直ちに校庭に集合すべし」と。武備整然たる一大隊の猛卒は今や敵と戰はずして猛火と戰へり「死地に乘入る六百騎」あゝ亦偉なる哉。一時間にして鎮火す、蓋し吾隊の與りて力ありしや論を待たず。

金澤は雨の天地、吾人には不幸晴雨を左右する靈

▲ 大隊前進 ▼

力なしと雖雨を恐れざるの慨あつて存す、雨何かわらむ、結束して集合する當千の勇士此に五百。午前七時大隊編制全く終り辰章旗の影優やかに、將に母校を後にして出陣の途に上らむとするや、凄風一過、石浦町政教新聞社の方向に當りて渦巻く黒烟高く天に冲し、回祿今や紅蓮の毒舌を振ふの慘景を呈せり、而も吾大隊は動かざる事巍然山の如し。大隊長馬を進めて訓じて曰く、「出發の期に臨んで目前の如き近火に遭

午前九時半再集合をなす、吾軍既に新兵にあらず、猛火と奮闘して之を撃退せしめ得し老武者也、半千の健兒豈意氣振はざらむや。大隊長悠々として馬を進ませ命令して曰く、

を毀損すべからず。

本大隊は氣車便により小松に至り更に片山津方向に進行せむとす、最初の豫定は小松片山津間に發火演習を行ふ都合なりしも、火災の爲め時間遅れしを以て未定なり。行軍中たると宿泊中たるとを問はず本校生徒たるの跡面

を毀損すべからず。

隊伍整々、大雨を犯して校門を出づ、一舉一動規あり律あり、驚嘆せる市民の中を過り、新しき古戦場に一時間前の活劇を忍び、武歩堂々停車場に向ふ。午前十一時四十分金澤を發し、松

午後一時三十三分小松停車場を發し、前記一般方畧に従ひ片山津へ向ふ、但し行軍常規の警戒は之を畧せり。

任の館ころに軍規の嚴肅を嘆じ、美川の松原に夾洒たる美趣を味ひつゝ、思想は車輪と共に轉じ、小松に着せしは午后正に一時。幾多の老父老母を喜び泣かしめけむ凱旋門下に於て一般方畧を授けらる。

一般方畧

敦賀港に上陸せし南軍支隊は五月二日大聖寺に達す、北軍支隊は之を邀撃せむ爲め北陸街道を南進し、五月三日小松に至り一小枝隊を日末新保ノ海濱を経て大聖寺方向に派遣せり（但し此の一小枝隊の演習は天候と時間との爲め都合により休止せり）。

小松を發するや道を海濱に取り、愛後の古蹟を右手に忍びつゝ、白砂青松洒々灑々たる小徑を辿る。雲尙は天を閉すと雖も朝來の細雨漸く晴れ、海風徐ろに紅頬をゆすつて夾氣頓に加はる、麥は青く花は紅に、或は青苔深く道を埋め、或は禽鳥耳を樂ましむる者あり。征夫と雖も豈詩趣なからむや。堇花の一株を私に手折つてノー

トに狭む風流漢あり、老鶯の聲に驚いて橋より滑り落ちむとする間拔漢あり、或は幽に詩吟を嘯いて中隊長に小言を食ふ小言食あり、人は様々、世は様々、面白き哉旅行、面白き哉人生！片山津を去る二里程より道路泥濘にして嶮惡、泥土靴を沒し、單列行進尙は不便を感ず、某先生の實戰談もまんざら法螺であるまいと皆々感

じ合へる者の如し。

▲宿舎▼

午後五時半片山津に着し共同浴場を圍んで宿舎命令を受く。

午後八時笹井大隊副官は各中隊に左の命令を傳達す。

大隊命令(五月三日午後八時於片山津)

一 明四日小松ニ向ヒ前進セムトス

一同日午前六時各中隊ハ本日停止セシ位置ニ

集合スベシ

一 演習ニ關スル命令ハ集合ノ上布ス

大隊本部

此の日火災の爲め演習を行ふを得ざりしは吾人の甚だ遺憾とせし所、猛士勇卒の切りに腕を撫して髀肉を嘆ずるもの多々。宿泊後三々伍々手を携へて實盛塚に懷古の情を忍ぶ者あり、ボートに乗じて美しき湖面に微笑を湛えしむる者あり、湖邊に佇んで靜に「湖上の美人」を吟ずる者あり、暮行く空に湖邊の詩趣を味つて旅寐の憂を忘るる五百の健兒美しき哉。三更人靜まりて夜は寂々、衛兵の靴音獨りカバリカバリ。人は各異るべけれど、晩春の景夢に入りて、綠滴る小松原、青波ゆらぐ麥隴のほとり、誰れか亦明日の功名を夢みざる者は。

▲第二日出發▼

明くれば五月四日、陰雲深く閉して、細雨又しても肅々、健兒枕を蹴りて三嘆して曰く天公何すれど無情なるやと、更に再呼湖上に叫んで曰く我何ぞ雨を恐れむやと。今や翠柳雨を含んで輕く領垂れ、涼風徐ろに懷に入りて晩春の景轉愁々。

午前七時片山津を發す、征衣既に雨に濕ひ、冷氣骨を襲ふものありと雖も、士氣豈衰へむや。動橋に着するや軍を兩分し、吉崎小谷兩中隊を

以て南軍支隊となし、戸部中隊を以て北軍支隊となす、此に於て南軍支隊へ與へられたる特別

方畧左の如し

南軍支隊特別方畧

一 情報に依れば敵は昨日の戰鬪に於て小松方向に退却せしも今朝再び我に向つて前進するものゝ如し目下其他に於て得る所なし

南軍支隊の前衛命令は次の如し

大隊命令(五月四日午前八時於動橋村)

一、敵ハ今朝小松ヲ發シ其ノ先頭ハ月津村ニ來ルモノ、如シ、我支隊ハ小松ヲ占領スルノ目的ヲ以テ前進セムトス

二、當支隊ハ前衛ニ任ゼラル

三、第三中隊ヲ前兵ニ任ズ、自餘ノ中隊(第二中隊ハ標旗)ヲ以テ前衛本隊トス、

四、前兵中隊ハ即時出發、高塚新田月津串ヲ經テ今江村ニ至ルベシ但シ特ニ右側ノ警戒

ニ注意スベシ

五、記號ハ規定ノ通り

六、余ハ前衛本隊ノ先頭ニアリ

吉崎大隊長

注意

一、敵ハ帽ニ日覆ヲ附ス

二、赤旗一本ハ中隊ヲ標示シ紅白旗一本ハ小

隊ヲ標示ス

三、磯田演習大隊長ハ本日審判官ノ位置ニツ

キ本官是ヨリ大隊長トナル

四、第三中隊ハ特ニ槩杖ニ注意スヘシ

依是觀是、吉崎大隊は敦賀港に上陸せし南軍の一小枝隊にして其の目的は小松占領にあり。之れに對して南軍の北進を邀撃せむか爲め北軍は

一支隊を派して北陸街道を南下せしめ五月三日小松に至り一小枝隊を大聖寺方面に派せしも天候と時間との都合上敵と砲火を交ふるに及ばず

して再び小松に退却せしより、五月四日拂曉小松に於ける北軍支隊は更に小枝隊を月津方面に派して出來得る限り攻撃軍の北進を阻害せしめ以て梯川（小松貫通）架橋を完成せむとす、此の任務を帯びたる小枝隊即ち戸部中隊是也。

戦今や其の幕を開かむとす、昨日まで同じ學窓に机を並べ、同じ校庭に手を携へし友も、一たび時到了ば鏑を削つて戦場に相見えんとす、誰れか亦一片の感慨なからむや。雲は依然として湖面を蔽ひ、急雨卒然として到ること屢次、士氣奮はざるにあらすど雖も誰れか友を討つて快とする者ぞ、孔子俑を作るを戒むる、あゝ味ある哉。

▲戦闘開始、月津村端の衝突▼

午前八時三十分南軍は威風堂々として前進を始む、小谷中隊之が前兵となり其の第一小隊を以て尖兵となす、新井小隊長之を卒ゆ。

尖兵長は切りに斥候を放ちて搜索甚だ力む。九時二十分月津村端に於て敵兵發見の報告に接せり。先是北軍戸部中隊長は地の利を察し品川翼準士官に命じ二個分隊を卒ゐて月津村南方隘路により一時南軍の前進を防止せしめ、別に久島、栗山、西村を拔擢し眞館分隊長之を卒ゐて同村端三百米突を距てたる小橋梁を破壊せしむ、四勇士死を犯して難に越き其の任務を完うして歸隊するを得たり。實に品川枝隊は其の兵力僅々二個分隊に過ぎずど雖も陣地極めて好良なるを以て或は隴に伏し、或は樹木により、或は人家に隠れ各自地物を利用して南軍の尖兵目懸けて突然急射す、戦闘は此に始まれり、時に九時二十五分。

新井小隊は直ちに道路右側の小丘に散開し、應戦甚だ力めしど雖も敵を撃退する能はず、此の趨勢を察せし小谷中隊長は原小隊をして新井小

隊の右翼に延身増加を行はしめ、別に宮田小隊をして右翼の水田を涉り敵の左翼に突進せしむ。

今や形勢一變せり。北軍は防戦よく力めしど雖も、三個中隊より成れる敵の猛烈なる射撃を受けるに及んでや、衆寡遂に敵し難く、足並漸く挫れむとす。機を見るに敏なる吉崎大隊長は時熟せりとなし、小谷中隊の一齊射撃に援護せられつゝ、奮然軍刀を振つて陣頭に立ち、前衛本隊をして本道を突撃せしむ。品川部隊逃るに機を失し、漸くにして逃れ得し者と雖も小澤小隊の追撃する所となり、殆んど全滅の悲運に陥れり。然れども南軍亦多大の損害を免れざりしや論なし。九時四十五分戦闘終る。急雨一過して麥隴更に青く、戦勝つて南軍の意氣天を突く。

はよく敵をして辟易せしめ、之れに多大の死傷を蒙らしめしを以て其任務を遂行し得たる者と稱すべし。されば南軍の將士は焦心憤懣一舉敵を潰走せしめざりしを悔い、追撃甚だ急也。

北軍の防備

然れども戸部中隊長は實に地の利を見るに明ある名將、何を易々として敵の追撃に任ずる者ならむや。新三湖台の要害を見るや直ちに之に陣し、四重の防禦線を書し、中山小隊をして第二線を守らしめ、道路西側の高地に據り、更に嶋田小隊を派して種馬所の小堤に據らしめ、中山小隊と共に第二線を形成し、品川枝隊を收容して茲に敵を防止せしむ。更に中山小隊の前方百米突にある一小丘に假設一個小隊（赤白旗一本）を送り第一線を守らしむ、中山小隊長之を指揮す。

▲新三湖臺の激戦▼

北軍の小枝隊は全滅の悲境に陥りしど雖も、尙

第三線は森岡小隊、假設一個小隊（赤白旗一本）

よりなり中山小隊の後方八十米の松林に陣し地勢最も高く新三湖台の要害即ち是也、戸部中隊長親ら指揮す、

第四線は新三湖台後方百米突なる密林にして、

若し第三線の維持不可能となる時は此の線に退いて必死の防禦をなさむとする者、實に北軍の最終防禦線なりとす、(蓋し戸部中隊長は前力二個の丘陵を以て第一防禦線となし後方二個の丘陵を以て援兵の陣地となしたりしも吾人は説明の便を計り之れを四線に區分せり)

南軍の隊形

防備既に斯の如し、南軍豈容易に之を撃退するを得むや。然れども吉崎大隊長亦千軍万馬を馳駢せし自任の老武者、敵の掌中にむざ／＼翻弄せらるゝが如き愚を學ぶものにあらず。況んや其下名將勇卒星の如きをや。

吉崎大隊長は敵の陣形を早くも看破し、其の第

一中隊を左翼とし、第三中隊を右翼とし、第二第四の兩假設中隊を中央に擁して全々敵を包圍せむ目的を以て前進せり

戰鬪開始

午前十時新三湖台大會戰は北軍中山隊の發砲によりて始まりぬ。南軍左翼高倉小隊は先づ敵の右翼を猛烈に攻撃し、之と同時に小澤小隊及び宮田小隊は敵の第一線に肉迫すること急也、右翼新井小隊は更に道路の松並を利用して第一線に側面攻撃を加ふ、第一線は今や殆んど包圍の狀態にあり、中山小隊長形勢の不利なるを見て第一線に退却を命ず、第一線加して第二線に入る。戸部中隊長は更に一個小隊を派して右翼に延身増加を行はしめ以て高倉小隊に當らしむ、

拾時二十分の形勢

北軍第二線は今や第一線を加へ更に本隊より一個小隊の援護を得て形勢頓に活力を生じ敵の中

央部隊に向つて頑固なる抵抗を試み北軍の陣形は轉じて楔形となれり。然れども南軍何ぞ避易する者ならむや。左翼高倉小隊は右響して敵の第二線に向つて側面攻撃をなし、左翼新井、原兩小隊は松林の敵を驅逐しつゝ北軍の左翼を突くこと轉急遽也、島田小隊先づ第三線に退き、中山小隊亦遂に孤軍奮闘すべからず、恨を吞んで第二防禦線を棄て第三線に加す。

第三線

第三線は新三湖台の要害也、水面を抜くこと三百米突、松林密ならず、粗ならず雜草身を隠すに適すと雖も、行動を妨ぐるまで大ならず、北軍此處を先途と戦はむとする宜なる哉。然れども南軍は今や第一第二の兩線を奪ひ破竹の勢を以て突進し來るもの其の意氣や實に壯とすべし。

戰機今や酣なり、北軍高地を利して盛に俯射し南軍の中央部惡戰見るに堪はず、吉崎大隊長焦

心憤氣切に前進を令す、南軍遂に死を決して敵に迫り其の右翼更に道路を前進して左響せむとするや戸部中隊長は遂に第四線に退却を命ず。

休戰

北軍一たび第三線の防備を棄て、第四線の密林に退くや、南軍右翼は直ちに此を占領し攻撃甚だ急也、南軍左翼亦新三湖台西方の平地に散解して密林に蟄集せむとする敵に向つて前進を試む。戰機は熟せり、轟々の音天地に響き湖面爲めに白波生ぜむとす。北軍既に形勢危殆なり、戸部中隊長意を決して「付ケ劍」を命ず、蓋し突撃以て一舉にして敵と雌雄を決せむと欲すればなり、南軍又何ぞ狐疑せむや直ちに突撃に移り敵の機先を制せむとす、突貫喇叭天地に響くや、吉崎大隊長の「突込ッ」の聲凄愴の氣を帯びて轉々慘然。今や正に大活劇は演ぜられたり、白刃湖水に映じて閃き喊聲松林を憾して起る、

二百米、百米、五十米、劍戟正に相接し搏撃正に起らむとする一刹那唳々たる休戦喇叭の響は晩春の野山を通して美しくも響き渡りぬ。時に午前十時四十分戦闘時間約四十分、

歸校

雨暫し晴れたり、雲の隙間より青空現はる。戦終るや敵豈敵たるを得むや、銃を横へ劍を撫し、互に手を取りて無事を喜び功名を談じ、快笑四邊に溢る。三湖の水澄みて靄雲たなびき、蘆の葉靜に動ひて春を送る早蟬の聲松林に静けし。十二時今江に着し、談笑の中したたかに中食を喫し瀛軍に乘じ三時半歸校す。

磯田大隊長の講評の概要は

第一日ハ不時ノ火災ノ爲メ豫定ノ演習ヲ行フヲ得ザリシハ余ノ遺憾トスル所ナリ、
第二日ノ演習ニ付キテハ瀛軍時間ノ都合上其經過ヲ急ギ、余ガ審判官トシテ爲シ得ベカラ

ザル要求ヲ或ル中隊長ニ爲シ、コトアリ又或ル注意ヲ或ル中隊長ニ與ヘタルコアリ、爲メニ兩軍ノ中隊ハ各自自由行動ニ出ヅル能ハザリシナルベキコハ余ノ信ジテ疑ハザル所ナリ、又時間ノ都合上兩軍ノ行動ヲ具ニ觀ルヲ得ザリシヲ以テ兩部隊ノ勝敗如何ハ茲ニ述ブルヲ得ズ、只余ガ觀察セシ範圍内ニ於テ特ニ注意スベキ必要アリト信ズル二三ノ点ヲ述ベム。
一、北軍ガ月津村ノ南方橋梁ヲ破壊シテ南軍ノ前進ヲ阻害セシニ對シ、南軍ノ先頭ナル路上斥候ノ行動ハ稍々見ルベキモノアリ、斥候ハ橋梁ノ破壊セラレアルヲ見ルヤ直チニ其ノ左右ヲ見廻ハシ、渡リ得ベキ他ノ橋梁ノ有無ヲ觀察セリ、之レ斥候トシテ此ノ場合ニ取ルベキ適當ナル行動トス。然レドモ該河ハ其破壊橋梁ノ上方水淺クシテ一見其徒涉シ得ベキヲ知ルニ難カラザリシナリ、カ、ル場合ニハ

敵前近距離ニ於テ徒ニ左右ヲ觀察セムヨリハ其ノ淺瀬ヲ發見シテ之レヲ報告スルガ如キハ最モ策ノ得タルモノニアラザルカ。

二、南軍尖兵ヨリノ報告ニ命令語ヲ用キタルモノアリ、大ナル誤謬ナルヤ言ヲ待タズ、謹ムベシ。

三、南軍ヲ月津村端ニテ阻止セシ北軍部隊ハ、南軍尖兵ノ三百米突以内ノ距離ニ來リシニ係ラズ、一發ノ射撃ヲモナサズ、尖兵ヲシテ悠々然トシテ自由行動ヲ取ラシメシハ機ヲ見ルニ敏ナラザルモノト稱スベシ

四、南軍ノ尖兵ハ北軍ノ前進部隊ニ對シテ突貫ヲ試ミムトシタルハ、敵ノ兵力判斷ヲ誤リシモノニシテ自ラ死地ニ陷ルモノナリ、故ニ審判官ハ之ニ停止ヲ命ゼリ、

五、散開ハ一般ニ不良ナリ、南軍右翼部隊ノ如キハ連絡ニ毫モ意ヲ用キザリキ、又散兵線

前ノ斥候ノ射撃開始後モ依然前方ニ止マリシモノアリシハ最モ危險トスル所ナリ、
六、行軍途上ノ動作ハ概シテ不可ナルナキニ近シ、只出發ノ際降雨ノ爲メ外套ノ頭巾ヲ被リシモノ、二、銃ヲ左肩ニ擔ヒシモノ一ヲ見受ケ注意ヲ與ヘ置キタリ、

七、宿營ハ概シテ靜肅ナリキ。
前述ノ如ク演習ニ就イテハ一般ニ未熟ノ点ハ免レズ、一言以テ今後ノ注意ヲ促ス

勇ましかりし發火演習も此に終を告げたり。雨雲今や南に収まりて雄雉なくや古城の邊、翠柳雨を帯びて晩春晚暮、綠趣滴るが如し。

樂しかりし發火演習、颯と過ぐる小夜嵐にも似たりけるよ。水村清らかなりし月津の邊、蘆花白くも散りし三湖の江、劍を把り銃を握りて攻め寄せ攻め返しけむ勇ましの面影も、今や雨滴貫く運動場の若草を踏むに及んでは、あゝ凡て

夢、臍ろに消ゆる過去の夢、眞白き人生の頁を埋むるさなき筆痕、あゝ人生さても夢なるか。否、否、夢むる人をして夢みさしめよ、只吾人は醒めむかな、醒めて働かむかな。兵は凶器也、戦は凶事なりとて誹るものをして誹らしめよ、吾人は刀を手になせむかな、刀を手にして奮闘せむ哉。ワーレンスタインの帝國主義を以て愚となすものをして愚と呼ばしめよ、吾人は愚を學ばむ哉、愚を學んで然る後賢に進まむ哉。二日間の發火演習、時は即ち短なりと雖も、吾人に奮闘の意義を教へたり、吾人に活動の精神を示したり、情眠の黨之を機として醒めて可也、退歩の人之を機として立つて可也。吾人は少くとも現代に於ては奮闘せざるべからず、奮闘は勿論人生の目的にあらずと雖も其の手段としては欠くべからざる者なり、情眠の士遊々の黨は手段を以て目的を律し、若しくは目的を以て手段

を撰び、其の結果鬱々として人生を醉生夢死に終らむとする者比々として然り、吾人の憂嘆措く能はざる所也。人生の歸趣は暫く之を論せずと雖も、理想に達する行程は全々活動的ならざるべからず、奮闘的ならざるべからず、廣義に解したる帝國主義ならざるべからず、若し夫醉夢の状態を以て満足せむとする男子あらむか、吾人は先づ此れに「鐵道往生でもしろ」と勸告せむと欲する者なり。金澤は雨多し、爲めに人心に影響を及ぼすや多大、又遊々情眠の士少しとせず、吾人は此等の徒に向つて奮起を切望して止まざる者也。

從軍餘錄

か、り、生

奇骨稜々

大隊副官の笹井君だつたと思ふ、片山津温泉で

夕膳に向ひ、膳上寂として湖上の暮色の如きを賞し、特に其鯛の鰭骨高くも秀でたるを喜び、撫然として嘆じて曰く「魚子あゝ何夫れ硬骨なるや、君奇骨稜々として遂に口にする能はず」と。

上原先生先發を主張す

上原先生片山津より小舟に乗りて先發せむことを主張して止まず、其理由とする所に曰「私は河合さんと同じく鐵道輸送係ですが、河合さんは足が長くて到底追付けませぬから、私だけ先發にして下さい」磯田大隊長を始め哄然大笑す。

餉ころと呼ぶ

森内分隊長身長高からず、草鞋を穿くこと極めて拙、加ふるに道路泥濘たり、歩々泥沫飛び上ること丈餘、脚絆と云はず、背囊と云はず、帽子の上より銃口の尖に至るまで凡て泥沫ならざるはなし、或人叫んで曰く「森内の餉ころが轉

つて行く！」

風流少尉

新井小隊長麥隴の中を通るや必ず麥莖を以て草笛を作る、これを鳴らすことしきりなり、指揮刀を片手に持つて片手に草笛とはあまり氣のきいた者にあらず、君を呼んで幼稚園と云ふは蓋し此れに起因すと云。

中山小隊長の急ぎ打ち懸れ！

新三湖台の激戦正に始まらむとし兩軍の氣勢間髪を容れず、偶悠然として道上を進行し來る黒帽の一隊あり、中山小隊長疾呼して曰く「前面に現はれたる敵兵に向ひ急ぎ打ち懸れ！」、あゝ何ぞ計らむ敵と見しは中村衛兵長の卒ゆる衛兵の一隊ならむとは。

本間先生の菫花

戦今や終り兩軍又銃して休息せし時なりき、本間先生某氏の劍を借り來り地を堀ることしきり

也、先生今や色も香も滴らむばかりに美しき葦の一株を家づくにせむとせる所なりき。某氏聞えぬ程の聲で問ふて曰「先生誰れに御土産になさるのです？」

味方に旗を奪はる

二日間の戦闘に於て、密田大隊旗手奮闘甚だ力む、其の影響にもやあらむ歸途中にて叩頭正に酬なり。某氏私に其旗を奪ふて之を隠す、旗手眼覺るに及んで先づ茫然、次に蹙然、次に憤然、其旗を發見するに及んで此に始めて含然然。此時同車中指揮刀を見失ふ小隊長一、劍を失ふ卒五、帽を失ふ卒三、甚だ劍呑なる一時間なりき。

庭球部報

花といふ花は既に枝を辭したが、緑に萌れた春の草は、いよゝ緑の色をますばかりだ。

月は五月、日は六日といふに、我が庭球部はその第一回大會を校庭コートに開催した。一方來賓のために張りまはした赤い幕、而して白く石灰で鮮明にしたライン、これが緑の草と配合して何ともいへぬ。時々はこれに彌次の黄な聲もまじつた。五色にいま一色ぞ足らぬなごゝ、敢て駄洒落を申すわけでは無いが、此の好時期での好場所、日頃鍛うた腕前を充分に顯はしてやるのかと思へば、身ぶるひがする程うれしい。さて競技は午前第九時に開かれた。それより引きつゞき舉行せられて、午後六時半ごろ漸くその終りを結んだ。そして今年はじめて本校第一回の大會が開催せられたの故を以て、撰手一同は記念のために撮影した。

今その番組勝敗を示せば左の通りである。なかに黒い圈点のあるのは、とくに目ざましき或は面白かつた勝負を顯すのである。

(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	勝
西南	岩柳	岡松	久栗	唐松	大廣	江小	杉加	飯・宇・古	高倉	
山	田沼	本村	島田	崎井	井木	口野	浦藤	盛・野・屋	倉	
							公猛			
1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	負
村松	小片	奥・京	横國	高長	木船	赤河	長長	吉・杉	荒尾	
澤田	室岡	住・極	田峰	松川	島津	松上	谷川	野・浦	見竹	
			清	半			松	翠		

(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	
2	2	2	2	3	2	2	2	2	
池大	新小	久茂	八齋	小東	白小	八本	井高	長原	
上澤	井林	留野	里田	澤郷	和上	波間	上松	澤田	
(富商)			(一中)			先生	(富中)		
0	0	1	1	2	1	0	1	1	
吉橋	宮相	奥赤	成川	千藤	宮鈴	西田	織織	野脇	
川本	本馬	田祖	川上	代・田	田木	田部	藤田	村田	
(二中)	(四中)	(警専)				先生			

(36)	(35)	(34)	(33)	(32)	(31)	(30)	以上三回勝負
3 小・千・澤	3 小・金・林 (醫專)	3 辻・平・手 (一中)	3 色・河・部 合	3 安・吉・田 (富中)	3 山・高・本 (醫專)	3 山・品・下 川	
2 藤・東・田 郷	2 横・村・松 田	2 今・渡・邊 田	2 大・村・井 橋 (石師)	0 森・前・田	1 大・小・泉 間・知 (富中)	1 長・森・本 (二中)	

備考 右方の上のローマ数字は、勝ちし回数を示す。

一中は石川縣第一中學、二中は第二中學
三中は第三中學、四中は第四中學、石師

右のうちで、少しく目についた勝負をいつて見やうに、

(31) は富中の小泉組と醫專の高組とである。

は富中の小泉組と醫專の高組とである。多分これが今日最も人氣ありたる勝負だつたかも知れない。小泉組は去年と比べると顔ぶれだ。去年の筆法を借りていへば可愛らしい少年組だ。これに反して高組はことに山本の肥大の軀はこの少年組に

相對してコントラストが滑稽だつた。その一度コートに顯るゝや、彌次が應援わ

る口は殆んど極に達した。然し結果は1に對する3にて高組の勝に歸し少年組は憐むべし敗北するところとなつた。

去年は知らないが一般に富中や富商の、但し富師はのぞきて、スタイルのよくなつたのは感心のほかない。たゞし打球とどにバックに至つては未だし也といふべしだ。

(32) の前田組の三回とも連敗したのは平常に比して意外の感があつた。

(33) は兩組ともに前衛なしだつた。河合組に於ける河合のドライブは屢成功して敵をして徒らにバネせしめた。

(34) 敵は一中の辻こちらは精英の渡邊組、はたして初め二回は此方の勝に歸した。しかるに後の三回は、つゞけさまに彼方に勝を占められたのである。これは渡邊組

の油斷によるか、しからずば敵に實力があつて致した結果であらう。

(35) 對抗勝負はこれが終りである。敵は醫專の金子組、これに對するわが校は老熟のほまれある村松組、随分面白い勝負もあつた。始めの二回は金子組の勝、次ぎの二回は村松組の勝、而して最後のゲームに於て勝を敵に輸したのは、かへすがへすも惜しかつたことだ。

(36) これは模範ゲームとして、我が校に於けるテニス界の御大將千代小澤、東郷藤田が互に相分れて雌雄を争うた、目覺しき勝負であつたのである。尤も(15)にも行はれたが今は畧してこの勝負を述ぶる。千代組に於て小澤、東郷組に於ては藤田が各々前衛をつとめた。一回目は東郷のサーブにて目の廻るやうな球も這入つた。

所だつた。

さて前衛は小澤が二つのミステーク、藤田が一つの成功で勝は東郷組に歸した。二回目には千代のサーブ、この時の見ものは小澤のスマッシュシング一つ成功したところ、東郷のコーナーを狙つて成功したところだ。勝は千代組。三回目は東郷のサーブ、千代小澤ともに一つ宛スマッシュシングの功があつたが敗をとつた。四回目は千代のサーブ、この際に於て千代のモーションの驚く程のものがあつた。勝は千代組。ゲームは愈々サーブといふ所まで進んだ。第五回は即ちその勝敗をば決定すべき大切な場合であつたのである。サーブは東郷なし、よい球もはいつたがカウントは進んでバンテリシアウトといふ危険なところへ來て、遂に次ぎのネットボールを以て敗をとつた。實際惜しい

結果は以上の如しだつたが、今概見を述べむに一般に我が校の成績のわるかつたのには、頗る驚かざるをえない。先づ三回勝負の對抗マッチを見るに、たつた二組の勝を得たのみで、あとの五回は皆他校に破れ、五回の方では品川組河合組の勝を制したばかりで、他の七組は徒らに彼等が名をなさしめしに過ぎなかつたのである。我が校諸君が實力のある所は遙にかけられ上にあれども、我は熱心の程度練習の度合ひが缺けて居りはせなんだか。この点のみは僻目とはいひまい、以後大に鑑る所あつて呉れ給へ。」打球とかスタイルとか、前衛とか後衛とか、はたドライブイングにあれロビングにあれ、まだく大に練習を要し研究すべき所のものが多し、諸君は現狀を以て満足するが如きことある勿れ。而して最も熱望するのは、サーブを第一

の球にて敵陣に送り入れることゝ、モーションを出來うる限り早くすることゝ、敵の弱点を見いだすことゝの三つである。これは誰れもいふことで、珍しくないだけそれだけ難いものだから、日頃これに大に意を用ひられむことを希望する。

それから最後に一二年の部員諸君に切に望む所がある。諸君も承知せらるゝ通り、これまで我が校の最も熱心家としてまた最も老練家として知られた、千代東郷等の諸君をはじめ殆んど過半はこの六月を以て校を去られむとするのである。即ち諸君はこの後繼者の重任に當つてゐる。強球家河合君、熱心家渡邊君今田君のありと雖も、なほく安心も満足も出來ぬ、來らむ年に於て、かの醫專などにもしも敗をとるやうなことがあつては、我が庭球部の恥辱たるは勿論、先輩の諸君に對しても甚だ面目なき次第である。

第であるから、是非一生懸命に練習し勵む所あつて呉れ給へ。これが筆をたくに當つての最大希望だ。(み)

高岡中學對抗野球仕合記事

五月五日、本校校庭に於て高中對四高の野球仕合あり。

彼我の顔ぶれは、

中岡	村島井	上岐條村
高	岫松	福筏鈎村土中正
高	田木崎島田	寛猛彌口
四	栗小藤久町	鈴加加江
PC	SS	1B 2B 3B R C L

左の如し、當日の激戦をこゝに略記せん。

第一戰

四高方初めに攻勢たり、町田四球を得て第一壘

を占む、息をもつかす長驅して第二壘に飛び入る。加藤猛SSに投球し敵の周章狼狽を笑つて難なく一壘を得たり、鈴木ゴロを打ち球は投手をのがれ1Bの鈎其の球を喰ひとめんとしあやまつて鼻を負傷す。其の間に町田ホームに入り次に藤崎巧に球を打ちて第一壘に入り各壘満されて審判官はフルベースの宣言をなすいざこれよりとて看衆手に汗を握る茲に江口打手として現る。あはれや三度振りにて斃る。次て久島の打撃一番外野のRを超えて尙遙かなり忽ちにして加藤猛、鈴木二点を占む。

小木三壘に扑され藤崎生還し栗田のフライ効なくして一壘を得るを得ずして終る(得点すでに五)

高岡中代りて攻め四高方守勢たり、岫球を一壘に打ち、運よく二壘に長驅するを得、福島の打撃効を奏し一壘に入る。四高方少しく陣形亂れ

IB SS多少の失敗を見たり。かくして岫福島生還し、篠井三壘の鈴木に殺さる村上三度振り鈎も同じく三度振りの厄に遇ふ。四高一の投手として名聲高き栗田のアウトカブの亂發にはとても若輩連の手をつくること能はざる所なんめり。其の魔球によりて敵二人迄もつゞけて難き仆せし効や賞するにあたりありと云ひつべし。(高中方は二点を収めぬ)

第二戰

走者を以て雄名ある町田第二壘を襲ふて成らず加藤猛球を三壘に直打して難なく一壘に入る。鈴木仆れ藤崎のCに打ちたる球によりて加藤ホーウに入るを得たりしも藤崎、江口共に名譽の戦死してこゝに第一戰の裏に移る栗田の魔球熱球の爲めバットのむだ振りのみ正村、土岐、中條枕をならべて討死とはあはれの狀なりき。(四高方、一点、高中、零)

第三戰

高岡方の投手少しく弱り氣味にて四球のみ連發す久島官費旅行にて樂々とホームに戻る。小木美事極まるセールフットを打ち電火石火人の知らぬまに早や三壘に悠平として立てる様や實に目ざましかりき。加藤彌敵のSS福島に手にかりて一壘に屍を曝らす。其の間に小木一点を取む栗田の打つたる熱球P1を苦しめ一壘に飛び込み息をもつかず大にベビッてホームに入る。げに其の舉動の敏なりや

町田の打球にSS破られ、ひるむ處を窺ひすでに第二壘に至る、加藤猛、球をSSに打ちSSの福島氣がきかぬ爲め手をつけず外野左翼の正村、亦も球を逸す無念なるべし、栗田一点を得、鈴木四球を得茲に復ひフルベースとなる。藤崎のフライ投手の岫にとられて爲めに仆れぬ。加藤猛が試みし冒險時機を失したりし爲め町田はよぎなく

三壘に斃る犠牲の彼を惜しまぬものぞなかりける彼が心中思ひやられてあはれなり。次いで高中攻勢の地位に代る。茲に栗田潛勢力を現して、猛球は熱球につぎ、魔球は狂球に次ぐ。高岡中學連ぎもを抜かれ零点とはなさけなし。栗田の獨舞臺の觀あり。また捕手たる小木またよくホームを守りて一寸の空隙だに見せず一度もPの熱球を逸せざりし手腕老練の士にあらざればよくするを得ざる所なり。

因に記るす栗田は水戸中學の出身小木は京都同志社の出身ともに斯界に錚々たる名手なり。

第四戰

江口初めて第一壘を占む。輕爽にも二壘を飛び出し敵の爲めに包圍せられ無殘やな袋の鼠よろしくと云ふていたらく追ひつ追はれつ二壘三壘の間に往きかひす。されど三壘を守りし村上の失敗にてセーフとなりし幸運兒は突進してホ

ームに生還す。實にきわどき働きぶりなりしよ小木久嶋ともに難なくホームに入る。加藤彌三度ぶりに遇ふ、栗田敵の捕手の手にかゝりて死し町田、加藤猛次いで二壘を占め、鈴木四球を得てフルベースとなり藤崎の打球によりて町田またもや犠牲となりてホームに倒る。可惜。高岡中代つて攻む。

松村三度ぶりにて死す。皆定まつたる死様なり。村上Pのドロップを打つて外野右翼にとられ、一壘に死す。

高中方で栗田の球を神妙に打つたるは松村獨りなりき。其の効や永く記録に残されん。鉤の球SS藤崎の逸する所となり二壘に長驅し機を見て飛び出し奇襲を試みあはれや無殘栗田町田の老練なる腕によりて拉がれぬ(四高三、高中零)第五戰

江口は三度ぶりにて、久島は三壘に、小木は二

壘に加藤彌は三壘に皆死す今回は餘程敵巧妙に守りたりき。投手岫の腕萎えしにや奇球にはた目にかゝらずドロップを出さんとして力足らずシヨーパーンボールにて敵を釣らんとす。奇策や効薄かりしやうなり未だ腕若し

代つて四高方守る。土岐中條ともに生還す岫Rと1Bとに殺さる、福島、篠井ともにPに殺さる

第六戰

町田、加藤猛、鈴木つゝいて生還し大に四高方振ふ。江口のあやまちの爲め藤崎は第三壘に心ならずも仆れ、久島もつならなく死す。

代つて高中攻む。松村第一壘に藤崎よりの球のセームタイムにて死す。

藤崎の功名とや云はん。時に栗田の意氣益々盛にてドロップ盛なり打手たゞ啞然としてバットを握るのみ。皆勞せずして無爲の裡に死す。其

の大功や捕手と投手との疎腕による。ベースマンも無爲に外野の連中も拱手黙々たり、この一戦もPの大喝采の裡に終りぬ。

第七戦

小木生還し加藤彌の高球はSSの福島に捕へられ栗田二壘に死す町田はSSの爲めに加藤猛のフライはし、の正村に美事なる御手柄を得しめぬ。

高中零点到終る

第八戦

鈴木、藤崎ともに死す久島喝然一聲狂球とんでSS逸すこの球は素人には一寸とれぬものなりとか。

加藤彌のフライPに美事せしめられてあへなく死す。

栗田「河野ばり」を初め、魔球又魔球、狂球又狂球、高中得点なし栗田は北陸の河野か？

第九戦

栗田左翼遙かに球を打ちこんだ拍子にホームに入る他に得点なく高中も零点到終りこゝに全く我校の大勝にて終りを告げぬ(野球狂人)

總得点表

四高 拾七点
高中 四 点

第十回春季水上運動會記事

時は明治三十九年四月二十九日。春季水上大運動會は大野川畔に於て開かれぬ。改築せられて一段壯美を添へたる我艇艇庫上には賞品授與席來賓席の設整然として、紅紫とりどり色美しき外國旗は高く朝風にかゞげられ向岸には特に審判席の設あり又時習寮の休憩場には「超越」の文字を染め出せる旒旗翻翻たり。日暖にして雲も遠く望めば、郊野千里、白嶺醫王の連峰は一抹

の淡霞につつまれてあたゝかに眠れるが如く、麥圃桑畑さては菜の花畑、心ちよくも染め分けられ、煙る柳に野鳩の影幽に、岸邊に生ひ出でし蘆の初芽は、春の水に洗はれ、そよふく朝風や亂れ色ざる菜の花の香もうれしかり。水には幾多の輕舸浮んで所せき迄に人見物す陸には双岸人を以てうづまれぬ、漁村の童や乙女等の常に變りて清げなる衣を着け集ひ來る様も流石に可憐深し。

午前十時第一回競漕を初む。軍樂隊が奏する囀曉たる樂聲は遠く水面に渡つて慰め勵されぬ

例によりて順を追ふて其の概略を記述せん
第一回一發の砲聲に三艇並び進む、青は見る見の中に他を後にして最も早く浮標を出で艇は中流に進み出でぬ、赤は必死の勇を鼓して、後を追へども力及ばずして終に青の勝となりぬ。其差三艇身余。青の舵手は名賣の唐崎船は名に負

ふ隼なり。(舵手唐崎有三、整調山下方四郎、五番小野一枝、四番關川寅之助、三番淺野彦太郎

二番碓井精一、一番今田實)

第二回赤容易に勝を占む。白は中ばにしてヲールを捨てて勝を爭はず、あまりにあつけなし。

(飯盛里安、安江安吉、矢田豊、藤崎小三郎、松原正治、田村貞亮、平井穗彦、艇雁)

第三回青は航路を失して競漕の資格を失ふ。白と赤との競争となり其の力伯仲し龍虎相搏つが如き觀を呈せり。決勝点より三百米突に進みき

たりたる頃より赤頓にピッチを早めヲールも碎けよ腕も折れよとばかり畢生の怪力を現して白を後にやりて進まんとす、白もさるもの爾よき敵とこれまた奮怒一番舳と舳とは相觸れんばかりにほとんど並進して決勝点に入れり。されど其處に三呎余の差を見出したらし審判官は高く赤旗を以て立てり。則ち名譽の月桂冠は赤の手

に落ちぬ赤に勝をゆづりし白組の心情思ひやられてあはれなり。吾等が豫想したるが如きめざましき競漕は初めて今回に於て出現せられたりと云ひつべし。(鏢形勝彌、大内靜雄、東郷外人、瑠石泰鎮、栗山敏雄、中村琢次郎、小林儀作、艇千鳥)

第四回青航路をあやまつ。而して赤勝つ。(山中三郎、板谷吉二郎、石井俊平、小野澄之助、原田永明、京極逸三、淺賀長兵衛、艇千鳥)

第五回四百米突に至るや赤青ハウルす。白遙か後方にあり。この虚に乗せんものと力めし氣味なりしが其の中に赤青相離れ青先に赤其の後に白また赤と相争ひて終に白優勢となり先進の青に追ひつく。青は白の航路を奪はんとするものの如し。白は怜悧にも青の突撃を去けて後、青の力疲るゝに乗じて其の航路を占取して決勝点に入り名譽ある勝を得たり。この競漕は今日一

の美事なるまた見映あるものなりしよ因に記す舵手西山新君は隅田の河流に、ヲールだ、こを作つた斯道の名手たりとか好囁々(西山新、奥田祐安、唐崎有三、廣木貞夫、佐藤勝榮太、大橋八郎、加藤猛雄、艇雁)

第六回縣立中學校撰手競漕一中の健兒をのせたる青と赤とは其の初めに於て力殆ど同じくいつれを兄とし何れを弟とし難く見ゆけり青五百米突過ぎて力抜けとても及はずと捨木鉢となりもはやヲールも亂れ勝ちに艇の進みも弱し赤は始終一貫力少しも撓まず直進して難なき勝を占む。赤三樹、高田省三、大森臣二、芦澤健、齋田十三、岸政教、岡部卓治艇集)

第七回三艇並行して仲よく進む。さるにいかにしたりけん青は左岸に寄せられ白に航路をとられて進むことを得ず、赤は順流によりて猛進す、赤白の相搏つを横目に睨んで知らぬもの、始く

はやすでに五百米突に迫りぬ白は心を焦慮し侮るべからざる速力にて漸々赤に迫り來りぬ。赤

第九回 三艇共に河流を應用して、相並進したるも五百米突を過ぎし頃、青獨り超越して他の

少しく驚きの色見ゆヲールもまばらにて、からくも白を後にして決勝点に入り、最後の勝利を占めたり。白の意氣盛なるものありしが不運にも約半艇身の差にて失敗せり無念の涙やるせなからぬ。(西村好時、大田原清美、久保田可全、永松政寛、三邊重治、小林毅郎、杉浦翠、艇千鳥)

第十回 來賓レースなり。盛なる拍手喝采に送られ艇上の勇士破顔一笑各ひそかに期待する所あるもの、如し。この競漕や如何にと堅唾を呑み出發の號砲を鶴首翹足して待つ程に一聲高く轟き渡る砲聲二艇共に細波をたてゝすすむ白素張らしき勢にていつも赤と非常なる差を以て進む赤心焦燥してヲールを整へ奮勵一番ヘビーをかけたる時や遅し、はや白は決勝点に入り名譽の月桂冠を得て一艇の勇士高らかに凱歌を唱して艇庫上にありき。白艇四番を漕ぎし小林君は、

第八回 醫專校撰手競漕 醫專校の有爲の士鐵腕を示して衆目を驚かさんとす。既に航程の半ばに至るや三艇等しく猛烈なるヲールを入れ白終に力盡き青赤の二龍、玉を争ふ、其のさまこそ當日の偉觀なりしか、やがて二者の潛力に差を生じたり、赤益々猛漕して一息に勝を占めたり。(西宇忠太、吉川友信、金子義長、近藤時雄、中川善松、山本直枝、宮城篤珍、雁)

白艇四番を漕ぎし小林君は、

墨堤に雄名を轟かしたる附屬中學立身の工科の大チャンとして今尙世の言の葉に残る斯界の名物男なり。醫專の宮田先生同しく白艇にあつて五番たり、醫專連中に胴上げせられて非常なる喝采を博したり。(田中君、岩田君、宮田君、小林君、吉村君、計見君、宮川君、千鳥)

第十一回 赤初めの程は非常なる優勢にてすみしが暫らくにして其の漕力衰へ青に追ひつかれて一場の奮闘を見る。青巧妙に赤のコースを奪ひ後をも顧みず猪進して艇を中流にやりぬこれを見てとつたる白はよき敵こそと云はぬばかりに突進して青の後を追ふ。されどいかにせん初めより遙か後方にありし白のこととて左様永き間漕力つくべき筈なく、中途に機を見て居たりし赤と相接觸し握手して其の勢をねぎらふものの如し。かくして白を去り青の後を追ふて猪突す、白如何にあせるも如何に奮ふも

最早詮なし。青終に白に三艇身半余の勝を占めぬ。(炭谷榮次郎、岡雪松、田中千吉、松岡邦、江口漢、肥佐多甲、市川濟一、隼)

第十二回 職員競漕なり。双岸溢るるばかりの看客一時にどよめき渡り、艇庫上は勿論到るところに拍手喝采湧き立ちかへる喧騒の裡に静々と赤白の二艇は漕き上りぬ。赤には浦井先生の舵手に青木先生の整調、これに對して白は中野先生の舵手に本間先生のリーダーいづれ勝を白眞弓暫し軍配もあげかねたり。二艇仲睦しく進むされど白みる／＼中に後れてもはや赤と手をとりに進み兼ねたり。赤は川流の利に乗り、獨り悠然として進む。友なる白には「待てよ待てよ」と呼ぶことゑすれど知らぬ顔して赤は權を合せて樂々と決勝点に入る。白はもはや勝得ぬものとあきらめてか艇を中流にとめて決勝点に入らんとせず随分永い間權をやすめやつと次

回の装艇整ひし頃悠然としてもどり來りぬ(浦井先生、青木先生、上原先生、田部先生、山瀬先生、戸部先生、小田切先生)

第十三回 一部撰手競漕なり。(因に記るす今回はある故障により各部撰手競漕を見るを得ず大に遺憾なりとす)日は早くも華やかなる殘江を織雲にうつして虞淵に沈まんとす。暮靄あたりに罩めたり。日頃鍛ひ上げたる鐵腕を振ふは今日こそ今よと呼ぶなる意氣高き健兒等をのせたる艇は應援の聲に送られて整然たる櫂水を蹴つて見る／＼中にはやくも薄暮の裡にかくれさりぬ。やがて鶴首して待つ程に上流スタートのあたり淡暗を縫ふて一團の白煙あがりぬすはと皆瞳を凝して其の形勢を見てやれば最も英氣満々たる一年級の健兒を乗たる赤の雁は、素さましさ漕勢を示して最先に進めり。二年級の白組少しも振はず。三年級の青これまた人の豫期せし

ほどの活勢もなく、とかく平凡にしてやはり赤の後であり。終に勝は一年級の占むる所となりぬ。其の始終一貫權荷しくも亂れずして美事なる勝を得たるわが校新進の撰手諸子の前途や實に好囑の至りなり以後大に奮勵して斯界の名手となるを祈期せよ。

(西山新、古山志郎、渡邊八郎、檜田太市郎、藤崎小三郎、鈴木三郎、小野一枝、雁)

第十四回 この度は二部の各級撰手競漕なり。初めの程は赤則ち一年級の撰手を乗せたる雁は前回と同じく他の二艇を超して獨り優勢なり。白これにをくれじと勢猛にそす、みける水陸には旗をふり聲をかぎりに應援今や盛なりとかくする間に白は赤と伯仲の地位にすゝみきたりここに筆紙に盡されぬ激烈なる奮漕は開かれぬ。決勝点迄ははや二百米突に足らず船に岸に溢る／＼の觀衆今は齊しく堅睡をのみ、手を握し

てこの奮戦を見るすは、此至大なる名興を双肩に負ふは白か赤か轟然一發の砲聲舉るよと見れば審判官の手には白旗か、けられぬ。あゝ白勝ちぬ、白勝ちぬ。拍手の音は歡呼の叫と相和して天地も揺がんばかりなりき（國峰專吉、孕石泰鎮、鈴木寛一、大内靜雄、飯盛星安、小野澄之助、木村嘉治、千鳥）

第十五回 三部の撰手競漕なり。初め青と白との競漕なりしが局面一變して赤優勢となり青と先を相争ふ、四百米突にいたり、頓に赤漕力を増し巧みに青の航路を阻みて難なく勝利を得たり、赤組は則ち一年級の新鋭なる撰手にて其の練習の効果を収め得て今日の名譽を擔へり。（細川寅之助、廣木貞夫、宮田格、吉田秀助、原田永明、秦資影前坊源一郎、千鳥）茲に於て第十回水上大運動會は圓滿に其の終を告げたり人影漸う朧にて水流また暗淡につゝまれ遠く欸乃の聲も

さびしげに江を渡りて人腸を斷つの思ひあり。（紫子）

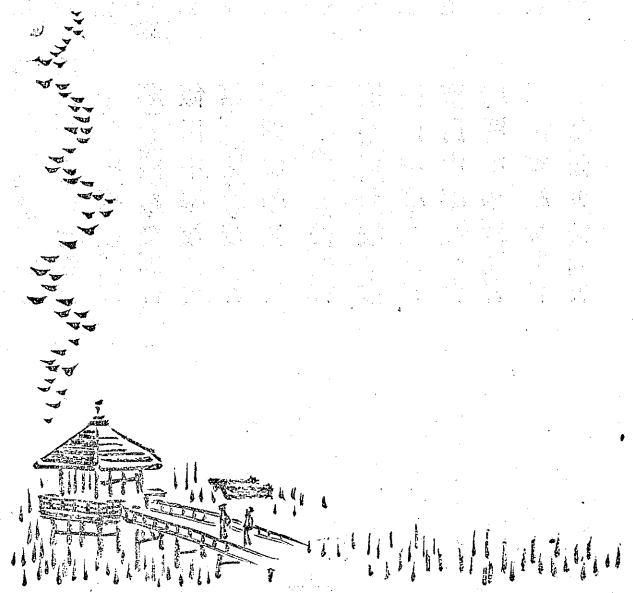
寄贈雜誌（北辰會宛）

- | | | |
|-------|----------------------|-----------|
| 十全會雜誌 | 第四十號 | 金澤醫專校同會 |
| 校友會報 | 第四十號 | 開成中學校同會 |
| 學友會雜誌 | 第四號 | 村上中學校同會 |
| 龍南會雜誌 | 第四百十五號 | 第五高等學校同會 |
| 商海 | 第四百十六號 | 大阪高等商校同會 |
| 輔仁會雜誌 | 第六十八號 | 學習院 |
| 校友會雜誌 | 第廿七號 | 三重第一中學校同會 |
| 嶽水會雜誌 | 第卅三號 | 第三高等學校同會 |
| 慶城文庫 | 第十九號 | 大垣中學校校友會 |
| 校友會雜誌 | 第百五十五號ヨリ
第百五十七號マデ | 第一高等學校同會 |
| 無盡燈 | 第四號ヨリ
第六號マデ | 無盡燈社 |
| 志乃夫草 | 第七號 | 福島中學校々友會 |
| 學友會報 | 第卅二號 | 山口高等商校同會 |
| 校友會雜誌 | 第廿號 | 麻布中學校同會 |

東亞同文會報告 第七十六號ヨリ
第七十八號マデ

- | | | |
|-------|-------|-----------|
| 校友會雜誌 | 第八號 | 德山中學校同會 |
| 華陽 | 第四十號 | 岐阜中學校華陽會 |
| 七生 | 第十三號 | 島根第三中學七生會 |
| 校友會雜誌 | 第二十號 | 千葉中學校同會 |
| 尚志會雜誌 | 第七十號 | 第二高等學校同會 |
| 校友會雜誌 | 第七十一號 | 飯田中學校同會 |
| 校友會雜誌 | 第五號 | 第六高等學校同會 |
| 校友會雜誌 | 第十一號 | 延岡中學校同會 |
| 校友會雜誌 | 第五號 | 東京高等商校同會 |
| 一橋會雜誌 | 第廿一號 | 第七高等學校同會 |
| 學友會雜誌 | 第七號 | 高田中學校同會 |
| 修養會雜誌 | 第十一號 | 廣島中學校同會 |
| 鯉城 | 第十五號 | 福岡中學校同會 |
| 矯々會雜誌 | 第九十號 | 岡山醫學校同會 |
| 校友會雜誌 | 第八號 | 愛知醫專校同會 |
| 同窓會雜誌 | 第十七號 | |





投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限る
一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治三十九年六月十八日印刷
明治三十九年六月二十一日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

明治印刷株式會社

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

